

J.H. Pestalozzi の『探究』の考察

〜新しいペスタロッチー像を求めて〜

黒澤英典

はじめに

現在、わが国では教育の問題が山積している。なぜいま、一八三年前に死んだペスタロッチーなのか疑問をもつ人もあろう。しかし、これに対していろいろな答えが考えられる。ペスタロッチーは、人類教育史上での永遠の教育者であり、また、彼が提起した多くの問題は、最近とくに話題となっている「幼少児の虐待・殺し」などを痛恨の痛みもって思うとき、二三〇年前、純朴なスイスにおいて社会問題化した《嬰兒殺し》について『立法と嬰兒殺し』（二七八〇年）のなかで、犯罪者自身犯した罪は咎められねばならないが、それ以上に愛するわが子を何故殺害しなければならなかったか、その事情を糾明し改めねばならないとして、社会改革の責任を立法者に求めたことである。ペスタロッチーの真の姿は《教育者》としてよりも、むしろ《社会改革家》としての重みを加えている。

《わが父》ペスタロッチーではなく、それも大切だが……人類の平和と幸せを地球社会にもたすために教育に生涯を捧げた人としてのペスタロッチーが大切だ。そして、彼は国民教育の普及に努力し、民主主義的文化について明確な考えに達していたのだという真の姿がわかってきた。そのことはスイスにおいて、ペスタロッチーの生涯における全著作が厳密な本文校訂を経て全集が出版されたからである。それは、彼の死から百年後の一九二七年であり、その完結は、第二次世界大戦を挟んで実に三〇年を経た一九五七年で、膨大な著作である。⁽¹⁾その著作のなかで、彼の根本思想を最も克明に著しているのが、『人類の発展における自然の歩みに関するわたしの探究』(Meine Nachforschungen über den Gang der Natur in der Entwicklung des Menschengeschlechts, 1797)⁽²⁾である。本稿では、この論文を中心にペスタロッチーの根本思想を考察したい。

一、問題の設定と『探究』で意図されているもの

ペスタロッチーは一七九七年に『人類の発展における自然の歩みについてのわたしの探究』(Meine Nachforschungen über den Gang der Natur in der Entwicklung des Menschengeschlechts, 1797. 以下略称『探究』⁽¹⁾)を発表した。この論文の構想は、すでに一七八〇年に『隠者の夕暮』(Die Abendstunde eines Einsiedlers, 1780) (以下略称、『夕暮』⁽²⁾) 刊行以来である。ペスタロッチーは、すべての哲学的な考察の永遠の課題である『人間とは何か』『人類とは何か』という問いに、心を奪われていた。自分の個人的な経験にしたがって、彼はその間、いろいろな時期に、すぐれて教育学的な見地からあるいは政治的な見地から、ときに楽天的に、あるいはより悲観的に取り扱った。

まず、ペスタロッチーの生きた歴史的社会的状況を見ておきたい。一八世紀後半のスイスを中心としたヨーロッ

パ世界の情勢はどうであったか。ペスタロッチーは、当時の社会悪、人間の墮落を素朴で純情な農民たちが幸せに暮らしていた純農村への紡績業の侵入による労働と、家庭生活の様態の急激な変化にあるとしている。しかも、当時ヨーロッパの先進諸国では、すでにマニユファクチュアの段階に入っており、分業化された作業によって大量生産をくわだてるといふ経営が行われていた。後の産業革命期ほど、激しく、大規模でないにしても、このマニユファクチュアのもとの年少労働者の賃労働、しかも、単調で、心身をむしばむ長時間労働が始まっていた。こうした前期資本主義の純農村への侵入は人間の知恵と人間形成にとって大切な自然の場である農耕の生産を主とする家庭生活を、親にも子どもにも失わせてしまった。農村における季節の変化のなかで、それぞれが創意を働かせながら、たがいに励まし合いながら、鋤を握って大地を耕す家族共同の農耕的生産生活こそ、真の自然の教育の場であったが、それはマニユファクチュア生産の農村への侵入によって崩れさりつつあった。⁽³⁾

このような時代状況の弊害のなかで、失われゆく人間性の回復を願っての叫びが、「わたしとは何ものか」「人類とは何ものか」と、自問する熟慮のなかで、人間の自然の本質の究明を著したのが、『夕暮』と『探究』である。

ペスタロッチー研究の第一人者であるシュプランガー (Eduard Spranger)⁽⁴⁾ は、「この『夕暮』と『探究』の二つの書はペスタロッチーの独自の個性的な世界を展開していて、ペスタロッチーの根本思想の研究にとって見逃すことのできない意義を持っている」と指摘し、さらにこの両書の難解さについて、次のように述懐している。

「ペスタロッチーについて、数十年間研究を続けてきたわたしには、つねに一つの謎がつきまとってきた。彼が理解されるのにかくも困難であるのは、どこに原因があるかということである。それは、彼に表現力が不足しているからだとは思わない。

というのは、彼はむしろ生まれつき能弁家で、その話し方たるや、あるいは炎のように、あるいは剣のように、

あるいはまた、静かなさやきから荒れ狂う嵐にいたるまで、およそ読者の心情を感動させる手法のすべてに精通しているからである」と述べている。⁵⁾

さて、ペスタロッチーは『夕暮』刊行後、すでに一七八〇年代の始めから『探究』執筆の構想を抱いていたことは、一七八五年二月一日付けチンツェンドルフ宛の書簡で「われわれ人間の自然の本質的の根本衝動に関し、また現代に至るまで人類が多様な境遇の中で多かれ少なかれ被ってきた、あらゆる幸・不幸の出来事の歴史と経験とに関する探究によって、従来なお明瞭にされたことのないと思われる、正しい人間教育の一般的理論を明らかにし、また正確に叙述するという計画」をペスタロッチーがもっていて、この計画は「小説第四部（『リーンハルトとゲルトルート』の完成以上に）彼の関心事であることを述べていることから明らかである。ペスタロッチー全集（批判版）の第九巻・一〇巻に収められている膨大な量の『読書摘録』は一七八五年六月として八年のものだが、それが『探究』執筆のための資料集めを目的としたものであることも疑いない。さらに、ペスタロッチーは「人間に関し、また人間の教育に関する研究のために資料を集め、この究極の目的のために読書するという構想にとりかかっています。それはこの年のわたしにとっては一つの新しい仕事です」と、友人ミュンテルに宛てた書簡のなかで述べている。

『探究』の著作の最大の意図は、人類社会の最も本質的な問題をあくまでも、ペスタロッチー自身の生命体験への反省に即して、究明しようとした誠実な探究の成果で、彼の数多い著作のなかで、最も深刻でかつまた包括的な人間探究の書である。そして、一言でいえば混沌としている一八世紀末のヨーロッパ社会における「人間的眞実」の探究であったと言える。

二、「探究」に至る思索の発展過程

『探究』の完成に至るまでのペスタロッチーの思索発展の紆余曲折の過程を、たどって見ることにしたい。一七九七年に『探究』が完成するが、すでに一七八〇年に『夕暮』の刊行時にその思想の萌芽をみることができ。ペスタロッチーの根本思想とも言うべき『探究』の完成までの苦悩の連続の一〇余年間であったと言える。この間の彼の思索の軌跡を発表した著作・論文の考察を通して明らかにしておきたい。この期間をおよそ三期に区分することができ。

第一期く一七八二年から一七八七年『ペスタロッチー全集』(校訂版)第九卷 (Pestalozzi Sämtliche Werke, 9. Band bearbeitet von Emanuel Dejung, Walter Guyer, Herbert Schönebaum (Berlin und Leipzig 1930)) の卷の所収論文は八編である、その中に本稿では『自然と社会の状態についての断片』と『人類の発展における道徳的諸概念の生成について』が含まれている。この期の彼の思想の特色は『社会政策的』傾向を示している。⁽²⁾

第二期く一七八七年から一七九五年『ペスタロッチー全集』(校訂版)第一〇卷 (Pestalozzi Sämtliche Werke, 10. Band bearbeitet von Emanuel Dejung, Herbert Schönebaum. (Berlin und Leipzig 1931))。所収論文一九編⁽³⁾、その中に本稿では『然りか否か』『馬鈴薯栽培を呼びかけるフランス政治誌に』、『シユテーフナー運動の犠牲者のための代弁』『チューリヒ湖畔の自由の友へ』の四論文が含まれている。この期の思索の特色は『社会哲学・政治哲学的』傾向を示している。⁽²⁾

第三期く一七九五年から一七九七年『ペスタロッチー全集』(校訂版)第一一巻 (Pestalozzi Sämtliche Werke, 11. Band bearbeitet von Emanuel Dejung, Hinrich Knittermeyer. (Berlin und Leipzig 1931)) の卷の所収論文

九編、その中に本稿では『家のための祈り』が含まれている。この期の思索の傾向は主として《政治改革・経済政策・市民の道徳・教育問題》等が中心課題であった。⁽³⁾

(二) 『自然と社会についての断片』の考察

まず、一七八三年には『自然と社会の状态についての断片』(Fragment über den Stand der Natur und der Gesellschaft, 1783. 以下略称『断片』⁽⁴⁾)は、ペスタロッチーが『探究』において完成する彼の思想の萌芽的發展過程において、最初に書きとめた覚書としての断片である。

この覚書は、彼を巡るさまざまな事件や読書を通して、ペスタロッチーの脳裏に描かれた問題を断片的に書き留めたものである。それ故、何らまとまった思想の論理的展開はみられない。しかし、この論文で注目すべきことは、『探究』の中心概念となる《自然状態》《社会状態》《道徳状態》という人間の異なる三状態の概念と、それら三つの状態の間の推移と発展という『探究』においてみられる思考の方式が現われている。

ペスタロッチーはこの『断片』を基礎資料として、人間における道徳性の成立の根拠について、一七八六年から一年かけて『人間の発展における道徳的諸概念の生成について』(Über die Entstehung der sittlichen Begriffe in der Entwicklung der Menschheit, 1786-7. 以後略称『生成』⁽⁵⁾)を著し、さらにフランス革命に対して、自由な一市民として自己の見解を表明した『然りか否か』(Ja oder Nein?, 1793)において、絶対主義による政治的支配を超えた次元に、各個人の人格性の道徳の立場があることを洞察しているが、このペスタロッチーの思考の発展は『探究』において結実されるのである。この『断片』について、ペスタロッチーの思考の軌跡を見ておきたい。

ペスタロッチーは近代国家における国家権力のあり方について、次のように述べている。

「国家は権力によってのみ、その意志を遂行することができる。それは、徳を命じ悪徳をこらしめてはならないではないか。国家はただ権利を保護し、各人の安定した現存の所有の享受が、害されないように維持しなければならない。キリスト教ないし宗教は、国家の事柄ではない。それは道徳的知恵の偉大な前進である。

しかし、その信仰箇条は、現存の所有の権利には触れず、従って政府とも関係ない。各自は信仰の教義に従うべきである！道徳的善や道徳的義務を、政治的権利と混同し、或いは法的に正しいところのものを、宗教の善と混同することは、真実の国家政治の単純な観点を混乱させるが、この混乱はそれが防止しようとしている、あたかもその犯罪を植え付ける。神への奉仕を強制したり、徳を植え付けるために、権力を強制したりすることは無意味である」⁽¹⁾

ここで述べられている考え方は、後に述べられている『然りか否か』において論究されている「キリスト教的国家」観の否定に通じるペスタロッチの国家観や宗教観にとって重要な指摘である。

つまり国家宗教としてのキリスト教が、否定されるところから、近代国家における政治と道徳との分離が生まれ、そこから神への奉仕を強制したり、徳を植え付けるために権力を強制したりするのではなくて、国家はただ権利を保護し、各人の安定した現存の所有の享受が、害されないように維持しなければならない、というペスタロッチの深い認識の正当性が理解される。

さらに、彼がこの書において財産の保証という点に、すべての政治や道徳や教育の立脚地のあることを強調していることは、生活現実から思索した、ペスタロッチ独特の考えであると言える。

また、政治の道徳は、常に各自に最低の財産ないし所有を保障し、その基礎の上で、各人の権利を確立して行く

ことにあると考へ、「すべての階層の現実の所有の完成とパンを得ることの基礎が、政治的な立法の最も大切な目的である。各階層の人々にとつて、最も適切な習慣と道徳との方向づけ、すなわち、パンを取得する道を完成することが、各階層における市民の安全保障の基礎を破壊するすべての犯罪に対する最も効果的な予防方法である」と、ペスタロッチーは述べている。⁵⁾

このことは、人々の権利と所有とが社会的に保証されていなかった、一八世紀末の絶対主義体制から、近代市民社会への転換期にあつた社会的状況の中で、ペスタロッチーの政治観や社会観として、極めて正義観に充ちた発言であり高く評価しなければならない。

さらに、この『断片』の最後に、次のように述べているペスタロッチーの言葉は、社会秩序をいかに維持し、幸せな民衆の家庭生活を維持して行くか、彼の社会観を知るうえで見逃すことが出来ない言葉である。

「社会的な現象が、生産階層（労働者階級）の根底を保障し、民衆の中にその境遇と不似合いの消費への衝動をひき起こさないようにする秩序正しい生活と労働との精神を破壊しないことが、家庭生活における知恵の達成と確立のための本質的な欲求である。このことは、特に商人階級にとつて重要である」と、結んでいる。⁶⁾

こうして見ると、この書は『探究』において完成された彼の政治的社会的思想の成熟が、どのような彼の苦悩と努力を経て、またいかなるかれの苦難の体験によつて、一〇年後にたどり着くかを知るうえで、彼の精神的発展を究明するにあつて重要な文献であると言える。

（二）『人類の発展における道徳的諸概念の生成について』の考察

次に、『探究』に至るための重要な文献は、一七八六年から一年間かけて書いた『人類の発展における道徳的諸

概念の生成について』(Über die Entstehung der sittlichen Begriffe in der Entwicklung der Menschheit, 1786-7. 以後『生成』と標記)である。

この『生成』は、一七八三年に『断片』で発表した内容を道徳的側面から補足しようとして書いたものである。これら二編は、『地方道徳の価値』や『社会の状態が林野の状態よりまさる時期如何』(いずれも一七八五年から八七年頃に書かれたもの)などの論稿と共に、人類の歴史的發展という大きな主題を、体系的に考察しようとした名著『探究』のための準備として書かれた論稿である。

『生成』において、ペスタロッチーはここで「人間の道徳的諸概念の発展の源泉は何処にあるのか」を考究している。それに対して「人間の道徳諸概念は、人間と人間との結合の産物であり、人間が他の人間と関係しないならそれらはあらわれないと言つてよい。」⁽⁹⁾

さらに、「自然は経験の一定の順序段階を通じて道徳的諸概念をあらわすが、これらの概念の最初の基本的輪郭は、自然状態、すなわち人類がまだ明確な社会に踏み入っていない状態のうちにも、既に明らかに存在するのである。」⁽¹⁰⁾と云う基本的な予想に立つて、人類における道徳発展の自然の秩序を明らかにしようとしている。

従つて、人間の自然の衝動がいかにして、道徳の本質へと生成するかという問題が、この『生成』の中心テーマをなしている。

ペスタロッチーは、この論稿で、従来からの問題設定の視点を、一八〇度転換していると言えらる。というのは、彼は「人間は本来いかにして墮落するか」を尋ねたが、ここでは、「人間の本性は道徳的存在である」と言う。それでは、善の萌芽は何処に在るのか、ペスタロッチーは彼の思想の発展過程において、最も原始的な状態から出発している。例えば、この論文の始めに述べているが、彼は果実を集めるような最も単純な人間の行為を、次のよう

に描いている。

道徳的なものは、そこでの人と人との出会いと共感の中に萌芽してくると、彼は考えている。つまり、「一人が幸運にも多くの胡桃を見つけ、他の人は少ししか見つけないうち、余分にもっている人が、まだ少ししか持っていない人を見るなら、彼はその人も欲しがっていることを知って、彼に分けてやるか、それとも分けてやらないか、そのどちらかだろう。

もし彼が相手に分けてやるなら、この原始人のうちに快感が生ずるが、反対の場合には不快の感情が生ずる。すなわち善悪の概念の本質的なものを感じられるのである。更に進んで、今日あなたが余分のものの中から分けてやった原始人が、あなたが翌日すべて失ってしまうのを見て、同じように分けてくれ、しかもあなたに分けることを喜ぶとしたら、そこにわれわれが感謝と呼ぶところの道徳的感情の本質が生ずる」⁽¹²⁾

このように、道徳性が萌芽し可能となる必然的前提は、人と人との関係の中に存在するとベスタロッチーは考えたのである。

この前提から出発してベスタロッチーは、道徳が人間の衝動・欲望の制御であり制限であることを認め、「人類が自然状態から道徳状態へと進歩するには、陶冶された克己の力が本質的に必要である。もし、人間がこの克己の力をもたず、またこの力の真の長所について正しい知識をもたないなら、社会的陶冶も人間を自然の状態以上に高めることはできず、むしろそれ以下に墮落させるかもしれない」⁽¹³⁾

と述べ、道徳の目的はかかる自己制御によって、かえって自然衝動を十分に満足させることにあると彼は考えている。

さらに「道徳的陶冶も真理の探究も、それが人類を向上させ得るためには、……単に真理のための真理は、人間

にとつて何の役にも立たず、彼がそれを得たとしても、自然はもともと彼と何の関係もないそのようなものの幻影から、彼を引き離してしまふ。

しかし、私の自然の第一の要求と一致する真理、わたしの生活の第一の時務を照明してくれる真理は、人類の自然を奥底から満足させる。」⁽¹⁴⁾

このような真理はどこにあり、それは何であるのか、ペスタロッチーは究明している。

この論文におけるペスタロッチーの社会状態についての考えは、社会の中であつて、人々が自由な行動の主体として、自由な活動を合理化するための組織として見ている。

それらの社会制度の中でとりわけ《所有》ないし《財産》を「人類の道德の本来の源泉」と見、「人間の道德は彼らの所有を通じて發展する」として、私有財産制を極めて重視していることは、道德を常に経済的条件に結びつけて考えるペスタロッチーの基本的態度を示すものとして注目しなくてはならない。

ペスタロッチーはルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778)⁽¹⁵⁾ の「原始自然状態」や「不平等の起源」に影響されつつも、民衆の職業生活や労働のもつ道德的意義を真剣に考える彼は、ルソーを空想的だと厳しく非難しているのも、注目しなくてはならない。

この論文『生成』は、あくまでも『探究』への構想の中で書きとめられた断片にすぎないもので、自然や社会や道德の本質的なものの考察、それら相互の深刻な矛盾の把握、さらに論述の不十分等々すべての点において、『探究』の論述には及ぶべきもないと言える。しかし、『探究』の完成より一〇年も前に書かれたことは、『探究』に結集された彼の根本思想の成熟が、いかに長期にわたる苦心と努力との結果であるかを示すものであつて、この点から言つて、この『生成』からもペスタロッチーの根本思想を究明する上で貴重な文献であると言える。

(三) 『然りか否か』の考察

次に、一七九三年に書かれた、『然りか否か—上層および下層のヨーロッパの人々の市民感情についての—自由人による意見の表明—』(Ja oder Nein?)は、ペスタロッチーが、自由な一市民としてフランス革命に対して自己の見解を明らかにした問題作である。しかし、この論文は彼の働きかけにもかかわらず、存命中には公刊することを時勢は許さなかった。

この書はフィヒテ (Johann Gottlieb Fichte, 1762-1814)¹⁶⁾ の勧めもあって、文化哲学的ないし歴史哲学的な体裁のものにまとめ発表することを意図していたとみられる。

『然りか否か』は、『探究』の前奏曲をなすばかりではなく、『探究』において展開された複雑な思想の中心理念が、何であるかを明らかにするうえでも、この『然り』のもつ意義は大きいと言える。

この書の冒頭「まえがき」でペスタロッチーは問題提起をして次のように述べている。

「ヨーロッパにおける国家支配の原則はわたしの青年時代以来、この冊子で述べるような印象をわたくしに与えてきた。……ヨーロッパ諸侯がもはや彼の王冠に安心しておられなくなったのは、時代の啓蒙に責任があるということは、真に正しい事であろうか。自由と人権とに関する流行の饒舌が、政治当局の権力を決定的な危険に陥れているというのは、真に正しいだろうか。……全民衆が、すべての現在の諸権力の所有状態の上に新しい王冠を築き上げるために、われわれの大陸に無秩序を広めることを目的とする、悪漢たちのクラブに売りわたされたというのは正しいであろうか。」

あるいは以上すべては、一つの夢想なのか。すなわち、反対に、我々の時代の境遇を不幸にしたのは、強大で決定的な統治の迷妄と苦痛と不正とであろうか。¹⁷⁾

フランス革命を引き起こした原因として断言できるものは、いわゆる「啓蒙の哲学」や人権や社会契約の自然法的理論が発展したということにあるのか、それとも、民衆の基本的な諸欲求を満足させられないような、当時の支配体制のうち求められべきか、換言すれば大革命をしなければ民衆の生存が侵害されると言うことに求められべきか。

これに対して、ペスタロッチーによれば支配的階層は、革命の中心原因として何よりもまず人権理念をあげ、革命は「哲学」および「民主主義」によってなされたのであるから、「われわれはすべての新しい《哲学》を軍隊によって踏みにじられてはならない」と叫んでいる。¹⁸⁾

これに対して民衆の側に立つ人々は、絶対主義の持つ圧政と国家体制とが、革命の原因であると主張している。ペスタロッチーはこの相入れない両者の前に立たされたが、ペスタロッチーの判断はいとも明確である。

すなわち、彼によれば《哲学》や《民主主義》ではなくて、《現実の状況》こそが革命の原因である。「人間の質的権利が、いかなる時代においても、そんなに一般的に、そんなに強制的に、そんなに内密に、そんなに人為的に、政府の力できれいに侵害されることはかつてなかった。」¹⁹⁾と、彼は述べている。

革命は社会の最も奥深い地殻の変動であり、歴史の必然であり、時代の歴史的現実状況の中からの発現である。

決していわゆる、「啓蒙の哲学」や「民主主義」ではない。まして、外部的な誘惑や扇動の結果ではないとペスタロッチーは考えた。

フランス革命以後のヨーロッパ世界では、革命の投げかけた衝撃が、いまだ生々しい現実性をもって人々の存在を根底から揺り動かしていた時であり、次々と蜂起する異常な事件は、人々に恐怖に満ちた心理的連鎖反応をも引き起こし、不安と動揺とが社会全体に覆いかぶさったような時であった。

そうした時代状況の中で、ペスタロッチーは革命の原因について、冷静な社会的状況への洞察を誤らなかつた。彼はこの洞察を基礎として、あれこれの異常な出来事を越えて、より高い歴史的状况の中で革命の原因を鋭く追求している。

『然り』の中心的課題をペスタロッチーは結論的に捉えれば、それは『道徳的国家』観の否定ということである。何故かと言えば、キリスト教的・道徳的なものを政治的権力の領域から原理的に区別し、新たに人間の『最も内的な自然』に結合することによって、道徳と社会、道徳と政治、内と外との二律背反的な緊張・対立を自覚したいということである。

一七八〇年代の『自然の途』を巡るペスタロッチーの思索の基調は、『夕暮』などにおいて最も典型的に象徴とされていた家庭的道徳的精神の賛美であり、従つてこの精神の連続的拡大として、現実国家を道徳化するという意図だった。

言い換えれば、道徳的な家父長的な人格関係を、そのまま現実政治の規範とすることによって、国家は再建され救済されなければならないし、またそうされうるといふ道徳的国家ないし道義国家の理念であった。

国家を道徳国家ないし道義国家とみる、いわば「神の国」としてみるという思想が、イデオロギー的には当時の絶対主義国家体制を、正当化する「哲学」だったことは言うまでもない。

従つて、『然り』においてペスタロッチーが「キリスト教的国家」観ないし「道徳的国家」観を拒絶するに至つたということは、極めて重要な指摘である。ペスタロッチーはこの論文のなかで新しい国家観を次のように述べている。

「新しい国家はキリスト教的ではない。否な、それはもはやキリスト教的ではありえない。キリスト教と国家と

は根本的に分離されなければならない」「福音主義は決して市民法の体系ではない」「現実界はキリスト教的には統治されない」「統治はほんらいキリスト教的ではない。国家は国家としてその制度の本質において、明らかに反キリスト教的に行動する」

従って、今や「王侯がキリスト教的に統治することを、われわれに要求すべきではない。」

このような発言を通して、ペスタロッチーは当時の絶対主義体制を基礎づけていたキリスト教的国家という観念を明確に否定した。

結局、ペスタロッチーはキリスト教は、あくまでも個々人の内的世界のことであり、国家はあくまでも権力の秩序であるから、両者は厳格に分離されなくてはならないというのである。

政治権力が政治権力である限り、人間の良心を外から侵害し、内面から自由な発想を生気づけた代わりに、強引に外から、これに干渉するようになる危険性から決して免れない。

ペスタロッチーは、かかる状態を批判し、改造する主体的個性を陶冶し、形成することが課題であると考えていた。彼はこの課題の理論的探究を『探究』において遂行し、『シユタンツ』²⁰において、この理論的探究の実践に取り組むのである。

(四) その他、『探究』へ至る（一七九五年から一七九七年）諸論考の考察

（その一）『馬鈴薯栽培を呼びかける』（Aufruf zum Kartoffelbau, 1794）は、『然り』に引き続いて、ペスタロッチーが革命以後の混乱と飢餓とに直面するフランス人に対し、特に農民の経済対策に対して時局の危機を訴えたものである。フランスでは革命後の混乱状態の中で民衆を飢餓の危険から守るためには、食糧の増産が急務となつて

いた。

食糧増産に対する、とりわけ馬鈴薯栽培に関するペスタロッチーの専門的知識は、ノイホーフ以来である。農業経営者として民衆救済の念願に燃え、農業についての知識や技術に精通していた、彼の重要な一面が鮮やかにあらわれている。

この小論の冒頭「革命が民衆の経済的欠陥のために、にっちもさっちも行かなくなるのではないかと、わたくしは前から恐れていた。……」⁽²⁾と述べ、最後にこう述べている、

「フランス人たちが、パンの代わりにそれほど多くの馬鈴薯を食用にするかという問題だ。……市民よ！テルの息子より弱気になるな！確固として静かに立て！必要ならばいつでも冷静な力強さをもって。パンを節約するときにも、馬鈴薯を食べる時にも、闘いにのぞんでも。そうすれば君たちは祖国を救えるのだ！」⁽²⁾

ペスタロッチーはここで農業専門家として、革命後の民衆の困窮の救済に、真剣に取り組んでいる姿を知ることができる。こうした彼の民衆救済の活動は、おのずと『探究』の思想のなかに脈々と流れている。

(その二)『シュテーフナー運動の犠牲者のための代弁』

一七九五年に『シュテーフナー運動の犠牲者のための代弁』(Fürsprache für die Opfer der Stäner Bewegung, 1795) が、発表された。

この小論は、革命の嵐がフランスの国境を越えてスイスにも波及してきた。この嵐は、先ずチューリヒ湖畔の一带を襲った。この地方における自由化運動の中心地は、湖の東北にあるシュテーフナーだった。チューリヒ政府はこうした運動の中に革命の開始を予感し、武力をもって動乱を鎮圧しようとした。一七九五年七月五日にはシュテーフナーは軍隊によって占領されるに至り、この運動の指導者は捕らえられて、チューリヒに連行され処分され

るという事件が起こった。

この危機的事件を眼前に見て、ペスタロッチーはその犠牲者のために、代弁することを決意し、チューリヒ政府に送ったものである。

この小論の冒頭で次のように述べている。

「尊敬すべき高貴な人々、祖国を愛する人々に！

わが祖国の臟腑を引き裂いた嵐の真直中において、国のお役に立とうとする一般的な国民運動の中で、わたしがただ一人無為に過ごすことは忍びない。」⁽²³⁾と切実な心情に燃え、チューリヒ政府に訴えている。

さらに「わたしは身分の低い人々の混乱の中に、自分の生活を溶け込ませてきた。民衆の経験はわたしの経験だ。彼らの感情はわたしの感情だ。彼らの真理はわたしの真理だ。わたしはさらにこうつけ加えなければならぬ。ほかではありようが無かったのだ。彼らの幾つかの誤謬と彼らの弱点までが、驚くほどわたしのそれに一致しているのだ。」⁽²⁴⁾と、述べている。

ここでは、彼は古き時代の単純さと幸福との回想から始めて、現実の状況の急激な変化と、新しい制度と人間の自然的欲求との不調和ということが、人間生活の不幸と混乱とを引き起こさせるのだと言い、とりわけ経済的生活条件の変化が、国家の一切の状況の根本改革を要求し、工業及び商業の発展は、従来の農業中心の国家制度の変革を必須ならしめるに至ったことを論じている。

そして、最後に「わたしが最後にこう付け加えることが許されるであろうか。もしも祖国がわたしを無用な人間と見なさず、わたしの最後の日々をなんらかの方法で祖国の福祉のために振り向けるように、祖国がわたくしを幸福にも評価してくれたら、わたしの生涯の夕暮れは祝福されるだろう。」⁽²⁵⁾と……。

ペスタロッチーのここでの洞察の鋭さは、『探究』における民衆の政治参加の精神の中に生かされている。

(その三)『チューリヒ湖畔の自由の友へ』

『然りか否か』がフランス革命についてのペスタロッチーの意見の表明であるならば、『チューリヒ湖畔の自由の友へ』(An die Freunde der Freiheit am Zürichsee und der Ender, 1795)と『シュテーターナー運動の犠牲者のための代弁』との二つの小論は、スイスにおける革命状態から生じた事件に対する、彼の宣言であり意見表明である。

一七九五年にはフランス革命は、ついにスイスの純朴な民衆の平和な暮らしを破壊するに至った。反乱と混乱との兆しは、チューリヒ湖畔の地方にも現われてきた。

だが、これらの地方ではフランスに見るような、過激な反乱や革命運動は生起しなくて、チューリヒ政府へ反省を求める建白書が提出される程度であった。しかし、この建白書の提出すら、当時のスイス政府には恐るべき革命の前兆であるとして拒絶された。もちろん、自由化運動に関係した者たちは厳しい処罰を受けた。これがいわゆるシュテーターナー運動である。

この書簡の冒頭、ペスタロッチーは《自由の友へ》とって呼びかけている。

「わたしは二年ほど前にあなたがたの湖畔で幸福な日々を送った。このとき、わたしは現に目の前で見ているような不幸など、とうていあり得ないと考えていた。

わたしは祝福されたあなたがたの地方のあらゆる要求が満たされ、あらゆる願いが叶えられるのではないかという夢に、進んで身を任せていたのだ。

わたくしの目が見ることができ、またわたしの心が感じることができた、あなたがたの境遇上の一切の苦悩、一切の屈辱、一切の停滞は、わたしの心を悲しませた。

……わたしはあなたがたの間に、自由への澁刺たる愛情をほとんど一般的に見出したとき嬉しかった。自由への澁刺たる愛情こそあなたがたの境遇の法的で、しかも誠実な改善を目指す濁りなき努力である。わたしはこれ以外には信じない。自由への澁刺たる愛情には、祖国の繁栄と公共的秩序の正義とを目指す願望に服さなければならぬという完全な責任の概念が結びついている。わたしはこの点を疑わない。²⁶⁾

この書簡の最後に、ペスタロッチーは『チューリヒ湖畔の自由の友へ』告げた。

「自由への願いを本当の必要の枠の中に留め給え！……友よ、その暁にわれわれの真直中で起こった犯罪を憂え驚愕した祖国は、われわれと再び和解するであろう。またわれわれと同様に、正義と秩序とを、忠誠と自由とを愛する人は、昔日のように再びあらゆる善を目差してわれわれと手を取り合うだろう。」

チューリッヒおよびフランス市民へ（ペスタロッチー）²⁷⁾

このようにペスタロッチーは市民の自由を論じ、政治的経済的市民の暮らしの中で自由を追求している。これは小論であるが、ペスタロッチーの政治経済論として重要な論文である。

（その四）『家のための祈り』

この小論は一七九七年『探究』と同じ年に書かれたもので、『家のための祈り』(Oratio pro domo.) の冒頭次のように述べている。「われわれは或る程度の道徳的・経済的・政治的繁栄を勝ち得ている。

われわれの民衆は分をわきまえ、慎ましく、善良な国民性を持っている。宗教心が、依然として少なからずわれわれの伏屋を満たしている。美風・秩序・純潔性・抜群の努力・経済的發展等々の精神は依然として多くの面で、我々の家庭の内部を支配している。この精神は宗教改革以後われわれの繁栄の基礎を定め、それを今日に至るまで常に高めてきた。

われわれは、土地の面積や地味の平凡さと比較して、そこから膨大な収入を上げているが、これはその精神のおかげだ。さらにわれわれの民衆の数から見ても、土地からの生産物と彼らの収入との関係を見ても、土地の資本価値や家庭の収益が著しく大きいこと、さらにわれわれの商業が一方高度の技術的努力とによって、他方各世代を貫いて固められてきた連帯性と、かなりの資本と、大きな経験とによって裏付けられていることは、やはりこの精神のおかげだ。」⁽²⁸⁾

ペスタロッチーは、当時のスイスの一般家庭を支配していた精神的風土をこのように賛美していた。一六・一七世紀の混乱のヨーロッパ世界の中で、中立を保ってきたスイスでは、民衆はまじめに日々暮らしを守り、産業は栄え、農牧生活が中心であった時代から、産業革命の影響から機械工業が導入された一八世紀後半に至っても、比較的民衆の暮らしは平穏であった。このころ、農民の家庭は生産の中心としての家長を中心として、生産共同体としてまとまり、集落を中心として多くの健全な美德や、秩序をもった地域共同社会が形成されていた。

ペスタロッチーが『夕暮』の中で、「居間の力」(Wohnstube kraft)⁽²⁹⁾を賛美していることは周知の通りである。

スイスへの産業革命の影響も、この家庭や居間の幸福と地域共同体の団結を破壊させるものであってはならない。しかし、産業資本の導入と工業化への気運とは時代の必然であった。ペスタロッチーの教育実践が、スイスにも進出し始めた農村マニファクチュアの状況に直面して、これに対処しなければならないという非常に困難な歴史的課題の自覚ともに、一人ひとりの子どもの内的無限の可能性の発展に、全力を尽くしていることは注目しなければならない。この小論はこうした激動の時代状況に直面して苦悩する、ペスタロッチーの思索の跡を見ることができる。以上、『探究』の完成まで一七八〇年から一七九七年の間のヨーロッパ社会における歴史的激動の時代を生きたペスタロッチーの思索と実践の軌跡を発表した諸論文によって究明してきた。ここでの諸論文にあらわされた

彼の思索の結晶は、『探究』の中に豊かに表現されている。

三、『探究』の成立過程

一七八三年に著した『夕暮』以来ペスタロッチーは、彼のすべての哲学的な考察の根本課題である《人間とは何か》(Was ist der Mensch?)、《人類とは何であるのか》(Was ist die Menschheit?)という問いに、心を奪われていた。

このソクラテス (Sokrates bc470-bc399) 以来の人類の永遠の課題とも言える根本課題に、一七九七年の『人類の発展における自然の歩みについてのわたしの探究』をもって、一応終符を打っている。

この間に彼が発表した著書は、すでに前章でも述べたようになり多数上がつているが、人間や自然の本質を主題とした『夕暮』と『探究』とは彼の思想的立場を明確に述べたもので、彼の精神的風土を知る上でも、貴重な論考である。

『夕暮』と『探究』とは、それぞれペスタロッチーの独自の個性的な世界を展開し、しかもこの二つの著書が互いに鮮やかな対照を示していることは、彼の精神史の研究にとっても見逃すことができない意義をもっている。

ペスタロッチーは彼の個人的な経験に従って、彼はその間をいろいろな時期に優れて教育学的な見地から、あるいは政治的な見地から、時に経済的な見地から、貧民救済の立場から、より楽天的に、あるいは悲観的に取り扱った。

この『探究』の執筆の構想は、ペスタロッチーの心の中では、早い日から考えていたものであった。『夕暮』を一七八〇年五月に刊行するが、すでにその直後から構想をまとめていたことは、第一章で述べた通り、友人チン

ツェンドル宛のペスタロッチーの書簡¹⁾で知ることができる。

「わたくしたち人間の本来の根本衝動に関し、また今日に至るまで人類が、多様な境遇の中で多かれ少なかれなめてきた、あらゆる幸・不幸の出来事の歴史と経験とに関する探究によって、従来なお明らかにされたことがないと思われる、正しい人間教育の一般的理論を明確に、また正確に叙述するという計画²⁾」を、ペスタロッチーが持っていた。この壮大な計画を実現するに当って、既に述べたように膨大な資料を集めた。そのことは、『ペスタロッチー全集』（批判版）の第九・一〇巻に収められている『読書摘録³⁾』でわれわれは知ることができる。『夕暮』を刊行してから『探究』を発表するまでのおよそ一七年間、ほとんど信じられないほどの苦心をしながら、長い熟慮と周到な準備によって成ったものと言ってよい。

このように『探究』は、ペスタロッチーが、『夕暮』を刊行した三四歳からなんと五一歳までの一七年間の歲月をかけて成ったものである。それ故、ペスタロッチーが全生涯をかけて彼の全精神を傾注した魂の表現であると言える。

彼自身も一市民としてフランス革命に対して自己の見解を表した『然り』の中で強い決意を述べている。

そうした意味でも、この書は人類社会の最も根本的な問題をあくまでも、ペスタロッチー自身の厳しい実体験の反省に即して究明しようとした真実の探究の成果で、彼の数多い著作の中で最も深刻でかつまた総合的な人間探究の書であることができる。

『探究』の「まえがき」の中でペスタロッチーは、「わたしの真理は民衆の真理であり、わたしの過ちは民衆の過ちである⁴⁾」という確信を持って、この矛盾に満ち人間の在るがままの実態を、自己自身の内なる姿を凝視することによって、突き止めようとする生命力のほとばしりをこの書の中に見ることができる。

四、『探究』の構成

『探究』は、『ペスタロッチー全集』（校訂版）第二二巻に『本文』、及び『草稿』が所収されている。^①内容はペスタロッチーの内的生命と世界観にとつて、一つの全く新しい時期が始まった。その内容には、彼の社会観の中心となつた、フランス革命前後の世界史的動乱のもたらした影響と、青年時代より傾倒していたルソーの『社会契約論』や『エミール』による自然観や社会観に大きな影響を受けている。若き日のペスタロッチーは、當時一六歳の内面への影響は大きかつたに違いない。また、この『探究』執筆当時に出会つた若きカント学徒であつたフィヒテを介してのカント哲学、とりわけ厳肅主義や自律主義の倫理学の影響は大きかつた。

ペスタロッチーは『探究』の冒頭「わたしはここでわたし自身の真理、すなわちわたしの生活経験が、わたしを到達させた単純な帰結のほか、もともと何事も知りえず、またそうすべきでない。……わたしは過去の哲学についても、現代の哲学についても無知である」と言っており、さらに終わりの方で「わたしはわたしの生のいばらの小道を、学問的陶冶のすべての現代的な方法を全く用いずに歩んできた」と言つてるにもかかわらず、ペスタロッチーが正しい人間教育の一般的理論を求めるために、一七・八世紀の大思想家に強い関心をもつて、これらの思想を深く学んでいたことを見落としてはならない。

その転機の動機とは二つある。

一つは、哲学的なもので、ペスタロッチーがカント倫理学の自律思想に感動させられたということ。二つ目は、フランス革命の進行が社会的政治的な見解についてペスタロッチーに根本的な思想の転換を強要したことである。

『探究』の構成（目次）は次のようになっている。^②

《献辞》

まえがき

① わたしの探究の基礎（カテゴリーは一八項目ある、筆者付言）

人間の認識・知識 取得 財産・資産 社会的状態 権力 名誉 支配
社会的権利 貴族 王権 自由 暴政 国法 好意 愛 宗教
わたしの個性の眼に映る人間像

② 本書の主題への移行

人間の誤ちの内面的同一性

わたしの最も本質的な見地の最初の叙述

一、自然状態においてわたしは何であるか

二、社会状態においてわたしは何であるのか

この節のための補説

三、道徳的状态においてわたしは何であるのか

本書の本質的結論

一、自然が作ったものとして

二、人類が作ったものとして、世界が作ったものとして

三、わたし自身が作ったものとして

わたしの本質的見地の二、三の結論

この結論のつづき

③ わたしの最も本質的な諸原則と、最初わたしの問題を見たとき心に浮かんだ単純な諸見地との一致

認識と知識 取得 財産と資産 権利 社会的状態 権力 名誉 服従 支配

貴族 商業 王権 法律的権利 自由 暴動 暴動は不法である 国法

動物的好意 愛 宗教 真理と権利

④ 本書の最終的結論

自然の作品としてわたしは何であるか

人類の作品としてわたしは何であるか

わたし自身の作品としてわたしは何であるのか

結論

以上が『探究』の内容構成である。「わたしとは何ものであるのか」、「人類とは何ものであるのか」、この永遠の課題に真摯に取り組んだ一人の人間の魂の記録である。

五、記述内容の分析

『探究』は次のような献辞から始まっている。

◎ 「ある貴人への献辞」 (Zuschrift an einen edlden Mann)

「畏敬の念からわたしはその貴人の名を秘しておく

だが、その人はわたしの意中の人が彼であり彼以外でないことを
わかつてくれるであらう」。

この献辞で言う貴人とは、フンチケル (Hunziker) の推定によれば、この貴人はダニエル・フェレンベルク (Daniel Fellenberg) であると言ふ。

◎『まえがき』の冒頭で次のように述べている。

◇閣下よー (Herr!)

或る国に民衆 (Volk) の為の真理を求めた二人の人がありました。

その一人は高貴の生まれで、彼が始めた国に善政を行うために夜も眠らず、昼もそのためにささげました。彼は目的を達しました。

彼の国は彼の知恵によって栄えました。

彼の頭上には賞賛と名誉とが冠せられました。

貴人たちは彼を信じ、

民衆は黙して彼に従ったのであります。

他のひとりはいわゆる徒勞の人で、

彼は目的を達しませんでした。

彼の労苦はことごとくに失敗しました。

彼は国のために尽くすことができず、

不運と苦悩と過ちとが彼の頭を押し曲げ、

彼の真理からあらゆる力を奪い、

彼の存在からあらゆる影響力を奪い、

国内の貴人たちは彼を知らず、

民衆は彼をあざけりました。

◇ 閣下よ！

民衆のための真理を本当に見つけたのは、二人の内のどちらだと思えますか。

世の人は即座に答えるではありません。

徒勞の人は夢見る人であり、

真理は貴人の側にある、と。⁽²⁾

しかし、この貴人はそう考えなかったのであります。徒勞の人が民衆の為の真理を求めて不断の探究をしていることを聞いたとき、貴人は彼のあばら家 (Hütte) を訪ねて、あなたは何を見たか、と尋ねました。

そこでこの人は貴人に対して彼の生涯の歩みを物語り、貴人はまた彼に対して彼の知らない多くの事情を説明したのであります。

徒勞の人は貴人の正しさを認め、また貴人は徒勞の人の経験に深く心を留めたのであります。彼らが別れるとき、二人の顔には静かな熱意があふれ、二人の口から次の言葉が出たのであります。

《わたしたちは二人とも善を求めた。そしてわたしたち二人とも間違っていた。⁽³⁾》

と、『探究』の「まえがき」で述懐している。

「ある国に民衆のために真理を求めた、二人の人」とは、その一人の高貴な人はダニエル・フェレンベルク (Daniel Fellenberg) であり、「他のひとりいわゆる徒勞の人」はペスタロッチー自身である。

さらに、「まえがき」の中で続けて次のように語っている。

「人間性 (menschlichen Natur) の内にあると思われるさまざまな矛盾は、次のような人にこそ、すなわち地位と境遇との類まれなる回り合わせのために、少なからぬ要求を持ちながら極度に圧迫せられ、ひどく不満足な活動のただ中にありながら、強制も屈従も知らぬ自然生活の感情を、ほとんど、老年に至るまでも生き生きと持ち続けることのできた人にこそ、おそらく他の人々に対するよりも強い影響を与えたであろう。

今、わたしは生涯の終わりに近く疲れ果てて座っている。そしてわたしは今うちひがれて心の奥底を傷つけられているものの、次のように自問するわたしの《おさなごころ》(Kindersinn) を楽しんでいる。」⁽¹⁾
と述べ、まず始めに、この書の基本的意図を次のように述べている。

「わたしは何か、また人類とは何か。(Was bin ich, und was ist das Menschengeschlecht?)

わたしは何をなしたか。また人類は何をなすのか。

わたしは在りしままの生の歩み (der Gang des Lebens) が、わたしをどんなものにしたか、知りたい。

わたしのあるがままの生の歩みが、人類をどんなものにするかを知りたい。

わたしの行為は本来どんな基礎から出てくるのか、またわたしの最も本質的な意見は本来どんな見地から出てくるのか、また現にわたしが生きている境遇のもとでは、それらは本来どんな基礎や見地から出てこなくてはならないか、それをわたしは知りたい。

人類の行為は本来どんな基礎から出てくるのか、また人類の最も本質的な意見は、本来どんな見地から出てくるのか：また現に人類が生きている境遇のもとでは、それらは本来どんな基礎や見地から出て来なくてはならないか、それをわたしは知りたい。⁽⁵⁾

冒頭、ペスタロッチーは「わたしとは何か?」「人類とは何か?」を自問している。そして「わたしの探究の歩みはその本質上、自然がわたしの個人的な発展そのものに与えた方向と異なる方向をとることはできない。」と述べ、さらに「だからこの探究のどの部分においてもわたしはある特定の哲学的根本命題から出発することは出来ない。わたしは、我々の世紀がこの問題に関して今までに明らかにした点さえ無視しなくてはならない。」⁽⁶⁾と、述べている。彼自身の生きた生活体験に基づいて《人間とは何か?》《人類とは何か?》を、真正面から探究しようとしているのである。そのためには、特定の哲学思想や彼の生きた一八世紀の思想さえ無視しなくてはならないと、この著作に立ち向かう強い意志が表明されている。そして、彼の内面の強い決意をこう語っている。

「わたし自身の内面にある真理、すなわちわたしの生活の体験が、わたしを到達させた単純な帰結の他、本来何事も知り得ず求めず、またそうすべきでもない。だが、まさにそれだから、この研究はわが同時代を生きる大多数の人々に対して、《彼らがこの世の物事をみる見方からあまりかけ離れない仕方、彼らの最も重要な諸問題に取り組むであろう》と。

ここで、ペスタロッチーは、自らの現実の生活体験から内面に沸きいづる考えに基づいて、社会的に困難な諸問題に取り組もうとする決意、それは同時代を生きる民衆の心に、そういうものであることを確信しているのである。

それは次のような彼の言葉で表現されている。

「わたしは同時代を生きる大多数の人々が、わたしの真理及びわたしの過ちのおおもとと同じものを心に抱いており、またわたしの感情と同じ感情が、同時代を生きる人々の内面を生氣付けていることを、確信する。……わたしの真理は民衆の真理であること、そしてわたしの過ちは民衆の過ちであることを確信する。……わたしは何であるか、それをわたしは問い続けた。何年もの間、わたしの心は動揺した。しかし、長い長い探究のすえ、ついにわたしは、次に述べる諸命題の中に、人類の発展の各時代における自然の小道を確実に追跡し、この小道の発端から終末までをたどって行くことのできる導きの糸があると思うようになった。」⁽²⁾

ここで、ペスタロッチーは、人間と自然についての探究の基本的方向を示している。

以上で「まえがき」を終わり、「探究」の本論に入ることにした。

大別すると本論は、四つの部分に分けられる。

第一部 わたしの探究の基礎

第二部 本書の主題

第三部 新しい観点と第一部の観点との一致

(最も本質的な諸原則と、最初わたしの問題を見たとき心に浮かんだ単純な諸見地との一致)

第四部 本書の最終的結論

それでは『人類の発展における自然の歩みについてのわたしの探究』について、第一部『わたしの探究の基礎』から見ていこう。

第一部 わたしの探究の基礎

『探究』は人間の本性に宿ると思われる諸矛盾から出発して、「わたくしは何であるのか、そして人類は何であるのか」と言う根本的命題の解決に取り組んでいる。

ペスタロッチーは第一部の冒頭で、彼自身の基本的思想の基礎的説明に役立つ概要を示している。すなわち

「人間は彼の動物的状態の頼りなさを経て、もろもろの認識に達する。

彼の認識は、人間を物の取得に導く。

取得は彼を所有状態に導く。

所有状態は彼を社会的状態に導く。

社会的状態は彼を財産・権力および名誉に導く。

名誉と権力とは彼を服従と支配とに導く。

服従と支配とは彼を貴族と官職と王冠とに導く

これらすべての状況が法律に基づく権利の状態を呼び起こす。

法律に基づく権利の状態は市民的自由を呼び起こす。⁽⁸⁾

ここに、ペスタロッチーが上げた一連の主要概念は正しいかどうか？人類の発展において自然はここに上げたような発展の道を進むであろうか。彼自身、次のように自問している。

「ここまで考えてきてわたしは自問する。わたしのこの一連の《考え》(Vorstellungen) は正しいであろうか、人類の発展において、自然はこのような道を進むだろうか、と——そこで、わたしはこれらの命題に含まれる一つ一つの主要概念(Hauptbegriff)について注目したのである。」⁽⁹⁾と、述べている。

そこで、これに関連して次に、彼が注目した《一八のカテゴリー》についてその要点を紹介することによって、ペスタロッチーのこの『探究』の基本的理念を認識しておきたい。

① 人間の認識・知恵 (Die Kenntnisse, das Wissen des Menschen)

「人間は彼の知識 (Wissen) の泉で、清らかな水を飲んで生気を得るが、彼がそこから更に、進んで行く時、彼の永遠の海の大波をかき分けて底知れぬ深みの上に泳ぎ出る時、彼の心は高鳴る。あるものその時、荒磯の激しい波にもまれ、あるものは未知の深淵の中に、さらに他のものは、山を削って深い谷に流れる嵐の中に躍りこむであろう。人はすべて死に向って進むのである」と。⁽⁶⁾

② 取得 (Erwerb)

「取得も知識と同様に、人類の自然状態が墮落して支えが無くなったことから生まれる。この頼りのなさが、われわれのいろいろな力を結合させて、沢山の制度や契約や協定や法律を作らざるを得なくなつた。そうすることによって、われわれは、社会生活の中で、われわれ相互の生活の楽しみを確実にし、満足なものにするという究極の目的を達しようとする。」⁽⁶⁾

③ 財産 (Eigentum) — 資産 (Besitzstand)

「財産は、われわれの動物的我欲を助長させて、そのために社会的目的の大きな障害となつた。特権階級は自分たちが何でもできると感じているから、『持てるものは幸いなり』の一語をもって、かれらの境遇を正当化している。……」⁽⁶⁾

④ 社会的状態 (Gesellschaftlicher Zustand)

「権力者は、社会的状態が彼の策略・彼の権力・彼の運勢によって支えられている状態に過ぎないと言ふことを

人々に認めさせたいと思っている。……至る所で権力を持つ人間は、市民の社会的権利を実際に認めることなしに、しかも市民社会の主人になろうとしてすべての可能な手段を用いている。

だがその原因は、深くわれわれの動物的本性の内に潜んでいるのだから、それについてわれわれは何も驚くにはあたらないのである。……すべての社会的不正は、その本質から見て、いつも私たちの動物的自然が社会的状態の中にありながら、社会的結合の目的に反して、自由に活動する結果である。だから社会的秩序のためのすべての方策は、要するにわたしの動物的自然のこの活動の範囲を、社会的目的のために制限しようとする社会的制度以外の何ものでもないのである。……」¹²⁾

⑤ 権力 (Macht)

「権力が権力である限り、人類の善良な弱さが至るところで、それに寄せている信頼に対して報いることはできない。権力に民衆は服従しなくてはならないのか、権力者の動物的欲望の単純な帰結たる彼らの要求を、そのまま認めなくてはならないのか？ 民衆はそれを認めざるを得ないのである。世の中が無法である限り、世界は自己の権利の理念も失ったのである。……権力者は彼自身が道徳的である時だけ、すなわち、彼が権力者として行動せぬ時だけ、わたくしに道徳的人間であれと要求することができる。権力者が彼の聖なる中に生き、奮い立ち、他人に仕えられようとせず、むしろ他人のために、仕えようとし、多くの人々を救うために、彼の生命を捧げようとする時だけ、権力者はわたくしに道徳的であれと要求することができる。それが、国王の権利を神聖なものとする彼の王冠の宝石である。この宝石が輝く所では、民衆は跪いて何の権利も求めない。だが、この宝石が欠けたり偽物であったりするときは、民衆は権利を必要とする。」¹³⁾

⑥ 名誉 (Ehre)

「……至るところで、名譽への衝動が動物的人間を導き、そのために彼は彼の着物や鼻輪を自己自身より大事にしたり、誰かが硝子珠やブランドーや勲章を用いて同胞を殺害したり、圧迫したりすることを企み、その為に出資すれば、その人のために自分の同胞をブランドーや硝子珠や勲章の為に、打ち殺したりするようになる。」¹⁴⁾

⑦ 服従 (Unterwerfung)

「服従の根拠は決して人類に自然に備わった奉仕の意志ではない。われわれの動物的本性の中には、そのような意志の跡形もない。服従の根拠は自己配慮である。……」¹⁵⁾

⑧ 支配 (Beherrschung)

「支配は本質的に統治とは違ったもので、それは、私有財産と私的な必要と私的な権利との単なる帰結である。……支配は統治以上に、国家における個々人の要求や傾向性によつて、決定される限りの社会的結合の目的に、その権利の基礎を置かなくてはならない。」¹⁶⁾

⑨ 社会的権利 (Gesellschaftliches Recht)

「……わたしは、わたしの利己的本性が社会的状態における社会的目的の一般的な崩壊に、決定的な影響を及ぼすということを見てきた。だから、社会的人間の第一の諸要求は、この状態の中で、わたしの我欲の誤ちを、一般的にまた有効に阻止できる一つの力を呼び求める。これらもろもろの要求の感じのうちに、人類のすべての法律制度的の起源がある。これらの制度が社会的目的と一致するところに、社会的権利の本質がある。……」¹⁷⁾

⑩ 貴族 (Adel)

「……貴族は過去の封建体制においては一般有産階級の中心として、この目的のための一手段であった。……貴族は僧侶と同じように人類の進歩を停滞させた。……彼は、国王と同様に世界の権利を憎んだ。彼は、富者と

同様に利己的であった。そして、権力者と同様に暴力的であった。……」⁽¹⁸⁾

⑪ 王権 (Kronrecht)

「……王権は、ただそれが社会的目的および社会的権利と一致することによってのみ社会的であり、またその限りにおいてのみ合法的である。……君主たちは崇拜に値することも有り得る。……」⁽¹⁹⁾

⑫ 自由 (Freiheit)

「人類は生の諸要求の享受において、自主独立でありたいという一般的な強い傾向性を持っている。自然的自由はわたしの動物力を完全に生かすことにおいて、この独立を得ることである。市民的自由は、自然的自由の代償物である。すなわち社会的独立の獲得である。……」⁽²⁰⁾

⑬ 暴政 (Tyrannie)

「暴政は社会的目的を持たず、また社会的目的に反して、わたくしの独立を冒すことである。暴政には野蛮な暴政と文明の暴政とがあつて、野蛮な暴政の下では、わたしは血を流し、文明の暴政の下では、(精神が) やつれる。だがどちらの場合でも、その本質は同じである。暴政は、権力の自然的自由 (die Naturfreiheit der Macht) による市民的権利 (bürgerlichen Rechts) の圧迫にほかならない。……」⁽²¹⁾

⑭ 暴動 (Aufuhr)

「社会的不法や無法な暴力の圧迫の下における人類の《呻吟》(Das Wimmern) は、決して暴動ではない。公共の秩序や社会的権利の為の方策が欠けていけば、それらを作り、弱体であれば、それらを強化しようとする人類の努力、この努力はいまだ品位を失っていない。わたしの人間性の奥底にあるものである。この努力を欠く人民 (Volk) は、いずれも深い邪悪へと転落した。お前の市民 (Bürger) の胸の中でこの努力が死滅するとき！祖国と

いう名よ、お前も死んだのだ。尊厳を失ったお前の国の人間たちは、公民 (Staatsbürger) となってしまうのだ。⁽²²⁾
「……」

⑮ 国法 (Staatsrecht)

「……わたしはここで社会状態における公の制度 (öffentlichen Einrichtungen) によって、生のすべての喜びが (alle Wonne des Lebens)、破壊されるだろうという予感がした。《国法とは何か》 (Was ist das Staatsrecht?)。わたくし自身、問わねばならなかった。

この時、わたしの心にはゲーテ (Goethe) の詩が浮かんだ。」(ゲーテの詩、『神性』より)⁽²³⁾

人間よ、崇高であれ

慈悲ぶかく善良であれ

そはこれのみが

われらの知る

すべてのものから

人間を区別するものだから。

……………

崇高な人間よ

慈悲ぶかく善良であれ

有用な法を

かわることなく創れ

そしてただわれらの予感するあの存在の

典型となれ。

⑯ 好意 (Wohlwollen)

「無邪気な気楽さはわたしの単に動物的な好意の母である。

このような好意をあなたは幼子にも未開人にも、……羊飼いにも見出す。人間の感覚の楽しみが快く、容易に得られるところでは、あなたは至る所にこのような好意を見出す。」⁽²⁴⁾

⑰ 愛 (Liebe)

「……動物的好意から愛は芽生える。……真の愛は信頼すべき誠実の神のところに高まるとき、初めてそれは、真の愛となる。

だがあなたは、この信頼すべき誠実の神の心をどこに見い出すか。……わたしは、現実社会の中に人間的愛を求めた。……」⁽²⁵⁾

⑱ 宗教 (Religion)

「……宗教の本質は、私自身の真実と本質とに関する私自身の内的判断以外のなものでもない。それは私自身の中でわたし自身を裁き、断罪し、また許すところの本性及びわたしの力の〈神的なひらめき〉(der göttliche Funken) 以外のなものでもない。……」⁽²⁶⁾

以上、一八の主要概念について、ペスタロッチーの考えを要約して示した。この項目についての見解を述べておきたい。

ペスタロッチーは、第一部の冒頭で、彼の「探究の基礎」の説明に役立つ第一部の短い概要を示している。すな

わち「人間は動物的たよりなさを経て、もろもろの認識に達する。」彼の認識は彼を取得へ導く。取得は所有状態へ、所有状態は社会状態へ導く。こうして最初に社会学的な概念について、それらの建設的な機能が述べられている。

ペスタロッチーは、ルソーの影響の下に自然状態は《善》であり、悪意の支配しなかった自然状態を認めている。

しかし、人間の自然状態は、ホッブス (Thomas Hobbes, 1588-1679) ⁽²⁷⁾ の言うように、人間の本性は利己的であり、人間を動かすのは快・苦の感情だと考えた。人間は自分自身の生命の維持するため、各人が欲するままに行動する自由があると説き、自然状態はまさに「万人の万人に対する闘争」の状態だと説いた。こうした自然状態の解釈に対して、ペスタロッチーは自然状態は、動物的な墮落へ移行するという危険性が内在していることを指摘し、彼が以前に楽天的な自然観のもとで認めていたように、所有状態(財産)が市民的生活の保証ではなく、むしろ反対に、「財産は、彼の手においては地上のすべての不幸が飛び出してくる《パンドラの箱》(Pandorens Büchse) となってしまう⁽²⁸⁾」と言う。

このようにして、人間は社会的状態に入っていく。しかし、社会的状態は権力と名誉をもたらし、名誉と権力は隷属と支配を招来すると、ペスタロッチーは考えている。「権力」は、それ自体無法である。従って、社会的状態は自然状態から本質的には少しも進歩していない。それゆえ、社会的な権利は決して道徳的な権利ではなく、動物的な権利の単なる変容にすぎないと、ペスタロッチーは考えている。

自由については、フランス革命によって持ち上がった問題を論究している。すでに、『然りか否か』(一七九三年)の中で市民のあり方を追究しているが、この『探究』では市民の内面的自律性の向上を目指すことの必要性を

理論的に論究している。

さらに、法・好意・愛、そして、ペスタロッチーは最後に宗教の内的本質を「私の本性の内的本質と同じように神聖である」と見なしている。より高貴な愛が存在するとすれば、『精神をして肉体を支配させようとする』人間の最高の努力も可能であり、「私の動物的な本性をさえ《私自身に向かつて》煽り立て、私を不可解な戦いに挑ませる」いっそう優れた力も可能である。人間はこの内在しているこの力を無限に使用できる。彼の為すべき義務のために、あるいは彼の欲望のために使用できる。後者の場合は、人間を不正と罪へ導くが、前者の場合には、人間は自らのできる最善のものを為そうと努め、かつ自分自身を醇化する。

この論究の前提としての第一部『探究の基礎』において、ペスタロッチーにとって特徴的なのは、彼が道徳的な要求を自然的な関係に結び付けていることである。

六、『探究』の課題」の考察―何を論究しようとしたのか

『本書の主題』まず冒頭で、次のような重要な命題をもって始まっている。「一人ひとりの人間は、著しく高度の市民的幸福と道徳的醇化とに向上して行くのに、なぜ、人類は不法の悲惨と内面的墮落の不幸のうちに滅びて行くのか。この点を私は明らかにしなくてはならない。さもないと私の生の歩みが、私に与えた印象は、私の墓場に至るまでついに一つの混沌でしかないであろう。やがて、私は環境が人間をつくるということを知った。しかし、同時に私は人間が環境をつくるということ、人間は彼の意志に従って環境をさまざまに統御する力を自分自身の内に持っていると言った。」¹⁾

ペスタロッチーは、いまやこの偶然と自由との混沌としたものを、解き明かし始める。

彼は、人間が地上で強制と辛苦を通してのみ進歩したことを知っている。他方、人間の本能のうちには、彼の健全な動物的な感情と思考と行為との基礎がある。問題は、人間が自分の動物的状态にとどまるかどうかである。あるいは、人間がそれを越えようと努力するかどうかである。人間が真理と権利（生活の諸価値）を重視するかどうかである。

真理と権利を重じないとすれば、人間は動物的であり、錯乱している。「もし人間が真理を求めるなら、彼は真理を見い出す。権利を望むなら彼はそれを持つ……。人間は彼の意志によって物が見えるが、しかし彼の意志によって盲目ともなる。人間は自分の意志によって自由であり、自分の意志によって奴隷ともなる。人間は自らの意志によって誠実ともなれば、彼の意志によって無頼漢ともなる。……」²⁾という。

ここでもペスタロッチーは、混沌としている状況の中で、人間自らの自由意志による主体的精神の自律を求めている。

◎ 『私の最も本質的問題についての最初の表明』

さて、ここで『探究』において、ペスタロッチーが最も論究しようとする《本質的問題》について検討しておきたい。

冒頭次のような告白から始まっている。「わたしにとって次のことが次第にはっきりしてきた。……私は私自身の内に、動物的な真理を持ち、社会的な真理を持ち、そして道徳的な真理を持つ。」³⁾従って、「私はこう考えた人間は、或いはむしろわたし自身は三つの異なった存在、すなわち動物的・社会的並びに道徳的な存在である。」⁴⁾

それゆえに、『私はなんであるか』という問いは、これら三つの異なった観点から取り扱われなければならない。

ペスタロッチーは、いまやこれらの三つの状態を順次考察するが、それらは独立した状態ではなく、それら相互の關係において考察する。

まず第一に、「私自身の内に動物的真理 (thierische Wahrheit) を持つ。すなわち私は、この世の万物を私自身のために存在する動物と見なす力を私自身の内に持っている。

第二に、私は社会的真理 (gesellschaftliche Wahrheit) をもつ。則ち、私はこの世の中の万物を、隣人たちとの契約及び協定の關係の内にある物と見なす力を持っている。

第三に、私は道德的真理 (sittliche Wahrheit) を持つ。すなわち私はこの世の万物を、動物欲求や私の社会的關係とは無關係に、ただそれらが私の内面的醇化 (innem Veredelung) のために、何を寄与するかと言う見地から見る力を持っている。⁽⁶⁾

こうして、ペスタロッチーは人間を自然状態・社会状態・そして道德的状态と言う視点から捉えようとした。

(二) 自然状態において私は何であるのか

ペスタロッチーは「言葉の正しい意味における (ルソーの意味での) 自然状態は、最高度の動物的な純朴さ状態である」という⁽⁶⁾。ここでは無邪気な好意が支配する。しかし私たちは、すでに墮落して自分の利己的な本能にしたがっている自然人 (Naturmensch) を考え、野蛮人と呼ぶ。はたして墮落していない自然状態は存在するのか、それはただ瞬間的に、子どもの誕生の時に存在するにすぎない。

この無垢な姿が、ペスタロッチーにとっては自然状態の理想の自然人の姿であるという。それは道德的状态の基礎で、人間の素朴さ素直さが秘められているからであると言う。

(二) 社会的状態において私は何であるのか

「社会的状態は本来自然的状态の制限において成り立つ。だが、人間は必要に迫られるまでは、自然状態の無上の喜び (die Wonne) に制限を加えない。」

しかも、人間は自然状態において深く墮落して、もはやそこに彼の動物的好意がまったく失われてしまうまでは、そのような必要に迫られることがない。だから彼が社会的状態に入るときは、彼はすでに根底から硬化しており《墮落した自然人》(ein verderbener Naturmensch) となっている。⁽⁷⁾

一七世紀のイギリスの思想家トーマス・ホブズ (Thomas Hobbes) が指摘するように、「社会状態はその本質において《万人の万人に対する戦い》の継続である。この戦いは、自然状態においてはただの形を変えているにすぎない。」⁽⁸⁾ 人間は社会的状態においては、墮落した自然状態におけると同じ存在であり、ここでも自分の動物的な欲求を満たそうと努めるだけである。さらに、ペスタロッチーは、この節のための補説の中で《社会的人間について》、次のように述べている。

「本来の意味での社会的人間の情調 (気分・趣) は本質的に利己的である。」

本来の意味での社会的状態は本質的に、我欲によって汚されていない協力の心を欠いている。

本来の意味での社会的人間は協力的でもなければ公正でもない。⁽⁹⁾と指摘している。

まさに、こうした社会的状態は、墮落した自然人の利己的本性の力が、支配している状態に外ならない。ペスタロッチーにとつては、一八世紀末のヨーロッパの封建制社会も過激な革命主義体制の下での社会も、まさに欺瞞と奸智と冷酷さの証明でしかなかった。

人間は、この社会状態において決して満足できないし、人間として完成されることもあり得ない。人間がこのこ

とに気づき、真の人としての完成に至るべき義務があるのだと認識した時、道徳的狀態が社会的狀態に結びついて行くのである。

(三) 道徳的状態において私は何であるのか

この節の冒頭ペスタロッチーはこう述べている。

「道徳的状態は全く自主的なものであり、決して他の状態の結果ではない。私はこの世の万物を、私の動物的な欲望や私の社会的諸関係とは無関係に、ただそれらが私の内面的醇化のために……表象する力を私自身の内に持っている。」⁽¹⁰⁾

この力が生まれてくるのは、「私の為すべきことを私の欲することの法則とする時、私自身を完成する」、⁽¹¹⁾と云う感情からである。

動物的状态はいかなる道徳も知らないし、社会的状態の内にあっても、私たちは道徳なしに済ませるであろう。「道徳は全く個人的である、それは二人の間には成り立つことはない。誰も私に代わって、私が存在すると感ずることはできない。誰も私に代わって、私が道徳的であると感ずることはできない。」⁽¹²⁾

ペスタロッチーは道徳的な自主性をこのように考えたが、この考えはカント (Immanuel Kant, 1724～1804) の自律思想に強く影響を受けている。

さて、「感性的な享樂と社会的な權利と道徳は、幼児期と青年期と成人期のように、相互に関連しあっているように思われる。」⁽¹³⁾つまり、人間が生きて行く中で混沌とした状態に置かれている。それゆえ、ペスタロッチーは、この世の中には《純粹道徳》は存在しないという。さらに、ペスタロッチーは彼の道徳觀を次のように述べている。

「もともと私の道徳は、私が自分を内面的に醇化しようとする、あるいは普通の言葉で言えば、正しい行いをしようとする純粹な意志と、一定の私の認識や一定状態の私の境遇とを結び付ける手段・方法に外ならない。

また私は、父として、子どもとして、上司として、部下として、自由人として、奴隸として、自己自身のためではなく、私が世話し、保護し、その権利を重んじ、また服従し信頼し感謝し、献身すべきであると私が確信するすべての人々の利益と満足とを求めようとする純粹で誠実に努力することである。

道徳的対象が私の個人的な生活に密接に関係すればするほど、私は自分の義務を尽くすためにますます多くの動機と手段を見い出す。自然が私の動物的存在を道徳的対象から遠ざければ遠ざけるだけ、私はその課題の中に道徳へのそのような刺激や動機や手段を見つけ出すことが、ますます少なくなる¹⁵⁾。

ここでペスタロッチーは人間の神的な本性と動物的本性、善性と我欲、善と悪、理想と現実等を不可分なものとして具体的・全体的に捉えて、両者の二元的な対立を克服しようとする独自のものの見方、考え方が示されている。

従って、「道徳的対象への動物的な接近は、道徳的な心情への「感性的な誘導手段」であり、それによって、わたしの我欲は私の好意と結び付く、この結合はそれだけではまだ私を道徳的なものとしなない。私は自分の自由な意志の努力によってのみ道徳的となるのである。

「公民としてのあるいは父親としての義務についての抽象的な概念も、乳飲み子の涙や祖国の危機ほどには、私の道徳的態度を促進しない。人間対人間の自然の關係に基づく代わりに、君子と臣下、貴族主義者と民主主義者等のような社会的差別に基づく政策は、人類を社会的状態を通して道徳的使命へ接近させる可能性から、ますますとおのいてゆく¹⁵⁾」と、ペスタロッチーは考えている。

◇《本書の本質的帰結》

「さて、ここに私があとを振り返り、人類の発展における自然の歩みを探りつつ辿って来た道は、結局私をどこに行きつかせたかと自問する。私は次の諸命題の内に、私の探究の本質的な結論を見い出すのである。」⁽¹⁶⁾
その命題は、ペスタロッチーはこの世界の中で彼自身を三つの様式で説明するのである。

一、「《自然が作ったものとして》(Als Werk der Natur) ……私は牧場の牛や山羊のように必然の作品であり、数千年後でさえ私の髪の毛の一本さえ変えることはできない。

二、「《人類が作ったものとして、世界が作ったものとして》(Als Werk meines Geschlechts, als Werk der Welt) ……私はアルプスの頂から小川に流れ落ちる水の一滴であり、川の激流に押し流され、やがて永遠の死の大海に (in den ewigen Meeren des Todes) 消えうせしむらう。

三、「《私自身を作ったものとして》(Als Werk meiner selbst) ……そのような作品として、私は私自身の内にわたし自身を彫りつける。それは不変の作品で——私の岩に刻まれた私自身はどんな波も洗い落とすことはいない。私が私自身のうちに道徳的本質として完成する私の作品の痕跡は、時もそれを消し去ることはない。」⁽¹⁷⁾

さらに、ペスタロッチーは「私は自然の作品としては、動物としては完成している。私自身の作品としては、私は完成に向かって努力する。人類の作品としては私は私の完成が不可能の地点に立ち留まらうとする。自然は自然の仕事に完全に成し終えた。そのようにあなたはあなたの仕事を成せ。あなた自身を知れ、そしてあなたの動物的自然の深い理解の上に、しかし、肉の絆のただ中で神のように生き得るあなたの内面の力を十分に知って、あなた自らを崇高ならしめるよう努力せよ」と述べ、人間性の完成に向かって、自己自身を向上させることの必要性を強く述べている。

こうした見解の帰結（「私の最も本質的な観点の成果」）は、すべての真の人間教育にとって極めて重要である。教育 (Erziehung) と立法 (Gesetzgebung) はこうした自然の歩みに従わねばならない。

教育と立法は、人間の自然的な関係に結び付き、かつ人間の好意 (Wohllöben) を維持するために、動物的存在としての人間に適合しなければならない。

「教育と立法は社会的存在としての人間のために、その市民的な境遇と誠実と信頼によって耐えうるものになければならない。しかし、とりわけ教育と立法は克己心を強めることによって、人間をその墮落から《自己自身の人間性を回復できる力》をもつように高めなければならない。」¹⁹⁾

七、諸原則と諸観点の一致

～私の最も本質的な諸原則と、最初私の問題を見たときの私の心に浮かんだ単純な諸観点との一致～

第三部は、以上探究してきた《本質的な原理》と第一部の《単純な観点》とが一致しているかどうかを検討している。

ペスタロッチーは、この冒頭、次のように述べている。

「これで私の書物は完結に近付いた。私の自然のうちに存在すると思われる様々な矛盾は、いつもこの世のすべての物に対して私の自然が三重の違った観点から、解決の糸口を見出す。……最初に私が問題を見出した時、私の眼に映った単純な諸見解が、私の探究の到達した最も本質的な諸結果と、どれだけ一致するのか確かめなければならぬ。」²⁰⁾と述べ探究の結果の検証を始めている。

ペスタロッチーは認識と知識、取得、財産、権利、社会的状態、権力、名誉、服従、支配等々の社会的な概念

を三重の観点のもとに、「自然の作品として」、「人類の作品として」、また「私自身の作品として」考察するが、その際、重点は最後の観点にある。現実の生活のさまざまな問題に対する人間の三重の態度は、端的に言って、次の三つである。

まず人間は、自然人としては自分の利己的な要求を、当然満たさざるを得ないこと、次に人間は公民としては拘束的な法と法律上の強制とを、是認すべきであること、そして、最後に、人間は道徳的な人格としては、自分の感性的並びに社会的な成果（財産・権利・権力・服従・支配）を他の人々のために用いようとするのである。

しかし、ペスタロッチーは、単なる観念的に、自分の感情や欲望をおさえる心の状態に留まっていけない。現実生きる人間は、息苦しい道徳一辺倒の中では、生きることができないことを十分に知っていた。

むしろ、民衆の実生活に対するペスタロッチーの憂慮は、民衆を再び道徳の観念的世界から、現実の生活体験の世界に連れ戻すことであり、真理を民衆の生活現実の諸要求に即して、実証すべき切実な必要性を示している。

このことは「愛」の項目において明らかである。冒頭次のように語っている。

「私の自然の作品、私の自然の自然のハーモニー奏でる弦の共鳴、私の動物的好意、そのようなものとしての愛は、私を動物的に満足させる感覚的な楽しみのある所にはどこにもある。……」²⁾と。

つまり、人間にとって自然的な好意は、無邪気の状態にとって永遠に調和している。それは、誠実さによって、道徳的な自制へと高められる。それが損なわれるのは、社会的状態の墮落の中においてである。愛の本質はこの世の貧しい人々、罪ある人々への宥和的献身である」³⁾と。

最後に《宗教》について見ておくことにする。冒頭、ペスタロッチーは「純粹な自然の作品としての宗教を人類は持たない。動物的無邪気は犠牲を行わず、祈らず、祝福もせず、呪詛もしない。

私の墮落せる自然の作品としての宗教は迷いである。

人類の作品・国家の作品としての宗教は欺瞞である。

ただ、私自身の作品としてのみ宗教は真理である。^①

ペスタロッチーは、宗教もまた「人類の作品として」「社会の作品として」、さらに「私自身の作品として」の三つの観点から考察している。

すなわち、私の自然の作品としては、宗教は誤謬であり、迷信である。人類の作品としては偽善であり狂信である。このようなものとして宗教は、多くの人々にとっては、宗教の本質である心情へと人々を導く外的な形式である。

私自身の作品としてのみ、宗教は真実である。「真の宗教は、道徳と同じように、全く個々人の事柄である。」

真の宗教は私自身を内面的に醇化する。「キリスト教は全く道徳である。だからそれはまったく個々人の人格の事柄でもある。キリスト教は断じて人類の作品ではない、それは断じて国家宗教でもなく、あるいはある権力的目的の為の国家の手段でもない。」^②

従って、国家や国民は宗教を持たないし、キリスト教を持たない。

こうして宗教は道徳と本質的に一致するように思われる。宗教のこのような「漠然とした概念」を乗り越えるものこそ、ペスタロッチーの信仰のあるべき姿であろう。

すなわちそれは、人間の内面に宿る神なものへの信仰である。ペスタロッチーの信仰は激しく動揺したが、それにもかかわらずに苦悩と幻滅を克服した。信仰によって、「かつてひとりのガリレア人（イエス・キリスト）は、多数の民衆を感性的な墮落から救いだし、民衆に信仰によって彼らに内面的な独立を与えた。……かつては信仰

が人間の内的独立を可能にしたのだが、しかし、今では妄想でない。今日それを可能にできるのは……真理と権利の領域のみである。」⁽⁶⁾

ペスタロッチーはここで再び现实生活の領域へ立ち返っている。

『探究』の第一部「私の探究の基礎」では、扱っていない《真理と権利》の領域を新たに付け加えている。この諸節の最後の総括とし、次のように述べている。

「私は諸節全体において、人類の発展における自然の歩みを追求するうちに、真理と権利とはただ人間が真理と権利とを尊重する限りにおいて、人間にとって真の価値をもつものであるということを知った。人間が単に動物的に行動し、ただ物的な力である限り、真理と権利との両者は、それは人類にとって欺瞞 (die Täuschung) と仮象 (der Schein) とであるに過ぎない。」

自由な人間的意志 (der freie menschliche Wille)、すなわち私自身の努力によって私の動物的自然の過ちと不法とから私を解放する私の内的自然の力が、人間にとって彼の現実的な真理と現実的な権利の唯一の源泉である。⁽⁷⁾

そして、私たちが、永遠の矛盾を繰り返しながら、真理と権利とを尊重することによって、私たちの心情を道徳的な態度に一步一步醇化して行くのである。

八、『探究』の最終的結論

ようやく、ペスタロッチーの《人間とは何か》《人類とは何か》苦闘に満ちた『探究』の最終的結論にたどり着いた。

この最終章の中でペスタロッチーは、本書の結論を次のように述べている。

「人間の幸福と人間の権利とは本来自然の作品としての及び人類の作品としての私自身を、私自身の作品としての私自身に従属させることに、動物及び市民としての私自身を人間としての私自身に従属させることに基づいている。……私はこの見地をもつて本書の結びとする。私の目的は叶えられた。すなわち私はこれまでの私の生の歩みが、私をどんなものにしたかを、でき得る限り私自身のうちに探究し、この探究を通して、現にあるがままの生の歩みが人類をどんなものにするか探究しようとした。私は私の行為がどんな基礎から出てくるか、また私の最も本質的な意見が本来どんな見地から出てくるかという説明を、できる限り私自身のうちに求めた。私は人類の行為が本来どんな基礎から出てくるか、また人類の最も本質的な意見がどんな見地から出てくるかという説明を、でき得る限り私自身の内に求めた。¹⁾

そして、さらに続けて、「わが同時代の人々よ (die Männer meines Zeitalters)。地位と境遇との類まれなる回り合わせのために、圧迫された不満足な活動のただ中にありながら、強制も屈従も知らない自然生活の感情を、ほとんど老年に至るまで生き生きと持ち続けることのできた一人の人間の、真理愛 (die Wahrheitsliebe)、人間愛 (die Menschenliebe)、自由愛 (die Freiheitsliebe) とに対して、今世紀 (一八世紀) の後半が与えてくれたさまざまな印象のこの記録を、ありのままに、理解していただきたい。²⁾」

ここで、ペスタロッチーは自らの生きざまを赤裸々に示して同時代の人々に理解を求めている。

「そして、私が私の人生の苦難に充ちた荊の途を、しかも学問的陶冶のすべての現代的な方法を全く用いることなく歩んだのに比べ、諸君がもっと平坦な大道を歩まれ、真理と権利との最も進んだ認識に達していられるにしても、どうか私の無遠慮な意見と、私の率直さに対してあえて皆さんのご注意と私の誤りに対して、皆さんの反論をお願いしたい。……」

私は、これまでの私の生涯を人類のために誠実に真面目に役立てようとしてきたが、これからも私はどんな教示をも、誠実に真面目に役立てるように努めるだろう。

そこで、私は最後に、『自然の作品として私は何であるのか?』(Was bin ich als Werk der Natur?)、《人類の作品として私は何であるのか?》(Was bin ich als Werk meines Geschlecht?)、《私自身の作品として私は何であるのか?》(Was bin ich als Werk meiner selbst?)、と言う三つの観点を今一度検討して置きた⁽³⁾。」と述べ、最後のまとめにはいつている。

私も、ここでもう一度、この三つの見解を再確認しておくことにしたい。

第一の見解《自然の作品として私は何であるか》

「自然の作品としての私は、私の感覚の楽しみその他には真理も権利も知らず、その為に本来の意味での社会的状態の中に惨めな、軽蔑すべき存在としてあらわれる。この社会状態の中で、私の知識のためにかえってならず者や乞食や夢想家に墮落するということ、また私が名誉を持てば、私の周りに集まる人々を光りに添い寄る虫を焼き殺すということ、また私が権力を持てば、私に服従する人々を権利なきものにするということ等々、これらのことは真実であるか」と、自問し「これらのことはすべて真実である。」と肯定し、次のように述懐している。

「私は自然の作品としては、物的な力であり、動物であり……永遠不変の動物的存在である。私は私の自身の力によって、わたし自身の作品としての私を、私の自然にとって可能なあらゆる完成に高めなくてはならない。私の運命が、私を世界のどんな片隅に投げようとも、私は世界の作品としての私を、その片隅にふさわしいものにしてはならない。……

左官が無用の石を鉄槌で打ち砕くように私を打ち砕き、最も具合の悪い石片の隙間をふさぐ詰め物に私を使う

だけである。それが社会的状態における自然人の運命である。

自然人は社会状態の中でこれ以上恵まれた運命に出会うことはできない。⁽⁵⁾

自然の作品としての私の運命であると述べている。

第二の見解《人類の作品としてわたしは何であるか》

「人類の作品としての私は、私の自然の作品と私自身の作品との中間に動揺しながら立っているということ、それは真実か。

人類の作品としての私は、私の動物的満足の為にも、私の道徳的醇化の為にも、確実な足場を見い出さないという事、それは真実であるか。その時、私は根底から墮落した自然人として市民社会の中に現れるということ、それは真実であるか。……

これらのことはすべて真実である。

私は単なる感覚的享楽 (blossen Sinnengenusses) の地点に安住することはできないのと同様に、私の社会的陶冶 (gesellschaftlichen Ausbildung) の地点にも安住することができない。

私は社会的状態の中で、満ち足りた動物的な自然生活の快楽の下に深く転落して行くか、それとも社会的硬化の墮落を乗り越えて高く飛翔するかしなくてはならない。

私は社会的冷酷さの中で、私の人間性を喪失するか、私の本能の廢墟の上に、道徳的権利の承認へ私を誘うような様々な経験を拾い集めるかしなくてはならない。⁽⁶⁾

と、ペスタロッチーは内面の告白をしている。

最後に、第三の見解《私の作品として私は何であるか》

「自然状態と市民的教養と道德との相互関係は、子どもの状態と徒弟時代と成人期との相互の関係と同様であるということ、それは真実であるか。

私が私の感覺的享樂の過ちを知らず、また私の社会的要求の不法を知らないなら、私は道德が予想する情緒的な気分には達しないであろうということ、それは真実であるか。

道德は全く個人の事柄であるということ、……自然状態は道德を知らず、また社会状態は道德に基づかないということ、これらのことは真実であるか。

本来の意味での市民的義務は、私を道德的にしないというのは真実であるか。

私はギルド（同業組合員）として、また大衆（Masse）として、為べきすべての事柄は、それ自身の内に私を不道德にする誘惑を持っているということ、それは真実であるか。

これらの事はすべて真実である！。

道德は、個人において彼の動物的自然および社会的冷酷さと密接に結び付いている。

しかし、道德の本質から見れば、道德は私の意志の自由に基づいている。

……道德の本質としての私は、ひたすら私自身の人間的完成に向かって進む。そして、私の自然のうちに在ると思われる様々な矛盾を、私自身の中で解消させることは、ただ、私が道德の本質であるときにのみ可能となる^(?)。

以上が、ペスタロッチーの最終的結論であった。

さらに、『探究』の最後のページにペスタロッチーは自らの心情を語っている。

「彼はすでに亡く、あなたはもはや彼を知らない。彼に関して残っているものは、踏みにじられた彼の生涯の乱れた足跡だけだ。彼は墮ちた。ちょうど果実がその若いとき北風に傷つき、害虫がその内部を食い荒らす時に、未

熟のままに木から墮ちるように、旅人よ (Wanderer)、墮ちた果実の為に一滴の涙を注げ。それは墮ちてもなおその頭をそれが夏の盛りをその枝の上で病み抜いた木の幹に寄せて、耳をすませば聞こえるほどに眩いたのだ。私は死んでもなお木の根を強めよう。

旅人よ、地上に落ちて朽ちゆく果実を勞られ。そして彼の滅びの最後の花粉 (dem Staub) に、せめてそれが夏の盛りを、その枝の上で病み抜いた木の根を培おう」と、ペスタロッチーは『探究』執筆の前の数年間、彼は絶望と希望の間をさまよった。

彼は現実の人間に絶望していたとは言え、自分の意志次第で変わりうるはずの人間に対する彼のあくなき確信は、必ずしも放棄できなかった。しかし、彼は自分に対する確信を喪失した。それは、同時代の人々が彼を信じなかったからである。

このような状況のなかで、彼は《人間とは何か》《私とは何ものであるのか》《人類とは何ものであるのか》を問いつけたのが、この『探究』である。

このように『探究』はペスタロッチーの八一年の生涯の中で最も厳しい幻滅の時代に書かれたものであるが、しかし、『民衆の幸せ』と『人類の平和』を願う彼は、決して未来に対しての再起の勇氣と希望を喪失したわけではなかった。

九、『探究』の特色とその価値

↳ 新しいペスタロッチー像を求めて

ペスタロッチーは西洋教育史上でも知られている通り、彼の教育思想は自己の生命体験に立ち、『生命』と『思

想』とが常に一体化しているところに、その特色を見ることができるといえる。同時に、ペスタロッチーの膨大な著作の中でも『探究』は、疑いもなく彼の思想発展の歩みの中で、最も重要な位置をしめている。それゆえに、シュプラランガーも語っているように、「理解されるのにも困難である」最も難解の著作であると言えらる。

それは、彼の一七九七年『探究』発表以後のあらゆる著作の、あらゆる努力の哲学的な基礎づけとなっている。彼はもともと、本書の「まえがき」の中で「ある国に民衆のための真理を求めた二人の人がおりました。その一人は高貴の生まれで、彼が治めた国に善政を行うために夜も眠らず、昼もそのために捧げました。彼は目的を達しました。彼の国は、彼の知恵によって栄えました。……」⁽¹⁾と云うように、国政の哲学を探すために出発していたが、彼が見出したのは、正しい社会的状態は、個々人の道徳の上に築かれねばならないということであった。ペスタロッチーは、政治学から倫理学へ進んだが、生活体験を重視する彼の信念からは、単なる理論にとどまることは出来なかった、そこで倫理学からさらに人間形成の学としての教育学へと進んだ。

ここでの彼は、「人間とは何か」、「人類とは何か」を論究しつつ、結局、人間の内的努力が、個々の人格を醇化し向上させることに到達した。これらの見解をペスタロッチーは、骨の折れる回り道をたどりながら展開したのであった。

次に、この『探究』の教育的価値について述べておきたい。

第一に、あげられることは、シュプランガー (Eduard Spranger) も言うように、この『探究』は人類社会の最も根本的な問題を、あくまでもペスタロッチー自身の生命体験への深い苦悩と反省に基づいて、究明しようとした真実な人間探究の成果で、彼の数多い著作の中で最も深刻でかつまた包括的な人間探究の書で、彼の根本思想を知らううえで最も重要な著作である。

第二に、「人間とは何か、私とは何であるのか、私は何をなしたか、人類は何をなしているのか」と、問いつつ、人間の内なる歩みを心理学的・社会学的観点から《自然状態》・《社会状態》そして《道徳的状态》に至る中で、それぞれの状態の特色を明らかにし、ペスタロッチー独自の人間観・社会観を示したことである。このことがその後の人間探究とりわけ教育研究に影響を与えたことは意義深いものである。

第三に、シュプランガーが指摘するように、環境教育学に対して、自力、自己活動、自己形成の勝利をペスタロッチーは、『探究』の中で極めて明瞭に表現している。

「やがて、私は環境が人間を作ることを知った。しかし、同時に、私は人間が環境を作るということ、人間が自らの意志にしたがって、環境をさまざまに統御する、ある種の力を、自分のうちに持っているということを知った。」^③

人間は内面に自己形成力を秘めており、環境に左右されるだけでなく、自己変革しうる力を持っているのであると自律的存在であることを指摘している。人間形成の諸力は人間自身の内にある。自己活動・自発性・自律性の教育学への新たな展望を拓いていることである。

第四に、「社会状態の本質は、その本質において万人の万人に対する戦いの継続である。この戦いは、自然状態の墮落において始まり、社会的状態においては、ただその形を変えているに過ぎない」と捉え、人類の発達して行くなかでの限界や市民的権利と市民的自由の本質と限界を明らかにしている。国家権力の本質を鋭く見抜いている。さらに重要なことは、国家と道徳、国家と宗教の問題は、国家権力の介入を否定し、あくまでも道徳や宗教の本質は、全く個人的なものであることを明確に述べている。ここにペスタロッチーの政治哲学・社会哲学・宗教哲学・道徳の原則が明示されている。

第五に、ジルバー (Kate Silber)⁽⁴⁾ が指摘するように、ペスタロッチーは『探究』の論究によって、つまり人間が市民社会のなかで生活できるようにするためには、人間がより優れた認識と一致して行動し、自分自身を真に醇化できるように、人間をもちもろの認識や技量へ陶冶しなければならぬ。人間が持たねばならない認識は、「万物の真理」を認識させることである。では『真理とは何か』。「人間にとつて真理とは：言葉で言い表せるものである。言語は、人類がこの世の万物の本性について、自分自身で作り出す表象のしかたに関する私自身の証言である。だから、人類に語ることを教えよ！」⁽⁵⁾と、ジルバーは「ペスタロッチーが『探究』で驚くべき方向転換を遂げ、『メトデー』の出発点に到達した。ペスタロッチーの言語についての論究は『ゲルトルート』は、いかにしてその子に教えるか』(Wie Gertrud ihre Kinder lehrt) のなかで継続され、文化政策的な問題は『わが時代に訴える(時代)』(Pestalozzi, an mein Zeitalter (Epochen)) の中で、メトデーの成果を踏まえて取り扱われている」⁽⁶⁾と指摘しているように、『探究』は以後のペスタロッチーの生活に結び付いた実践活動のうえで重要な意味を持っている。

最後に、この『探究』は、ペスタロッチーの苦難に充ちた生涯を一貫して、社会的存在として民衆の中に彼自身の身をおき、矛盾と絶望と挫折のなかで、人類の平和と民衆の幸せを求めて、悪戦苦闘した真摯な魂の記録であることを付言して置きたい。

おわりに

ペスタロッチーの生涯と彼のめざした事業について、述べて終わりにしたい。彼の生涯は、これを端的に表現すれば、〈愛〉と〈真実〉と〈正義〉に生きようとした、一人物の壮大なドラマであると言える。八一年の生涯の中で

彼が生み落とした著作は、人間の幸せを求めて、悪戦苦闘した真摯な魂の記録である。この偉大な人物のすべてを、一つのまとまりのあるものとして提示することは、決してなまやさしいことではない。

そこで、第二次世界大戦後のペスタロッチー研究の第一人者、かつまた苦難に満ちた生涯をペスタロッチー研究に捧げたケーテ・ジルバー (Käte Silber) の言葉を通して《新たなペスタロッチー像》の提示に耳を傾けたい。

「ペスタロッチーは自らをただ、後進のために道を用意する先駆者、あるいは《荒野に叫ぶ人》とみなしていた。ソクラテス (Sokrates) のように、彼は人々の良心を駆りたて、彼らがそれに答えざるを得ないように問いかけた。彼は一つの典型、いわば努力しながら戦いながら勝利し、悩み、愛し、献身し続ける人間であった。

ペスタロッチーの究極の目標は、教授法でもなければ、まして子どもたちの教育あるいは貧民の運命の改善でもなかった。彼の《夢 (der Traum)》は、すべての人間のより優れた力を強化することによって、彼らの《幸せ》を保証し、それによって人類に《安らぎ (die Beruhigung)》と《平和 (der Frieden)》をもたらすことであった。：彼が主張したのは、民衆自身の力を発展させ、かつ使用することが、可能であるばかりか、必要でもあるということである。彼はあらゆる人間、いわばもつとも墮落した人間の内にさえ宿るより高い可能性を信じ、一人ひとりの人間の教育を受ける権利と、この権利を充足させる社会の義務とを導きだした。このようにして、彼は民主的な文化についての一つの新しい見解を創造し、普遍的な民衆教育のための道を用意した。：講演や書簡の中に生きている彼の善意や愛の力と苦難に耐え忍ぶ力、高貴なものも卑しいものも、すべてを理解し許容する彼の人間性——これらは二〇世紀の人々の胸をも揺さぶり、彼の精神の息吹を感得させずにはおかない」と。ジルバーは、最後にペスタロッチーに畏敬の念を込めて、次のように述べている。「今日ペスタロッチーは《私たちにとって何を意味するか》。自然から離反、勞せずして多くを求めめる傾向、ますます進展する専門化、国家の干渉、大衆の平均化

の時代において、彼は自主的な思考、誠実な仕事さらに人々に、道義的な責任の意義を示し、また自然的な生活領域の確保、すなわち〈母と子の関係〉、家族の触れあいならびに、教養ある中産階層の職業共同体の確保の重要性を示している。彼によれば世の中は人間の満足・向上ならびに、幸せ以上に必要な物はない。ペスタロッチーはその生涯とおして、いかに障害が大きくても、自己の課題に専念し、かつ自らを犠牲にする意志さえあれば、一つの信念を実現できる実例を示している。⁽²⁾

このようにペスタロッチーは、生涯をかけて、社会改革家として《民衆の幸せ》と《人類の平和》のために、何を私たちは為すべきか問いかけている。二一世紀こそ、子どもたちが幸せに、また地球社会の平和を求めて未来に挑戦しなければと、ペスタロッチーは現代に生きる私たちに問いかけている。

「追記」本稿は大学院時代の恩師・田花為雄先生との出会いがなかったら生まれなかった。先生のご指導のもとで『探究』を読んだ半世紀前の日々を想い、いまは亡き先生の学恩に感謝しつつ、この小論を先生の霊前に捧げるものである。

注

はじめに

- (1) ペスタロッチー著作全集(校訂版)・Johann Heinrich Pestalozzi. Sämtliche Werke. Kritische Ausgabe. Hg. von Artur Buchenau, Eduard Spranger, Hans Stettbacher. Berlin 1927 ff. Bd. I-XXXIII außer XIII.
- (2) ditto. 12. Band. 1938. Schriften aus der Zeit von 1797-1799. ss. 1-166.

一

- (1) Pestalozzi Sämtliche Werke. hg von Artur Buchenau. Eduard Spranger. Hans Stettbacher. 12. Band. 1938. Schriften aus der Zeit von 1797-1799. ss. 1-166. 日本語版『長田新編『ペスタロッチー全集』平凡社版、一九五九年第六巻。虎竹正之訳、一三三三頁所収。
 - (2) ditto. I. Band. 1927. SS. 262-281. 福島政雄訳『隠者の夕暮』目黒書店一九三五年。長田新訳『隠者の夕暮・シュタントダより』(岩波文庫)岩波書店、一九四七年。
 - (3) 梅根悟著『世界教育史』光文社、一九五七年。二七六〜九頁参照
 - (4) Eduard Spranger (1882-1963) ドイツの哲学者・教育学者。ペスタロッチー研究の第一人者。テイルートイ(Wilhelm Dilthey 1833-1911)の流れをくみ精神科学的心理学によって文化哲学に学問的基礎を与えようと努めた。著書に『生の諸形式』『文化と教育』など多数。
 - (5) Eduard Spranger. Pestalozzis Denkenform der Erziehung 1961. s. 6. 吉本均訳『教育の思考形式』明治図書、一九六二年二三頁。
 - (6) Pestalozzi Sämtliche Werke. hg von Artur Buchenau. Eduard Spranger. Hans Stettbacher. 9. Band. 1930. ss 437-610. 10. Band. 1931. ss. 315-516.
 - (7) 長田 新『探究』[「解題」]、『ペスタロッチー全集』第六巻、平凡社一九五九年、三〜四頁参照。
- 二
- (1) 第一期(一七八二〜一七八七年)の論文の特色は、『立法と嬰兒殺し』に象徴されるようにペスタロッチーの主たる関心は、当時の社会的矛盾にたいするもので、論調の傾向は《社会政策》的傾向をもつてゐた。(Pestalozzi Sämtliche Werke, 9. Band. 1930)
- この期の論文は次の通りである。
1. Über Gesetzgebung und Kindermord. Wahrheiten "Täume, Nachforschungen und Bilder. 1780.
 2. Memoire über ad "Über Verbrechen und Straffen" 1782.
 3. Memoire über Eigentum und Verbrechen. 1782.

4. Fragment über den Stand der Natur und der Gesellschaft. 1783.
5. Particularschreiben an Herrn Zunftmeister Bürkli von Zürich über den von Herr Helfer Lavater in Motion gebrachten Vorschlag, die Saz und Ordnungen E.L. Ehegerichts der Stadt Zürich betreffend. 1784.
6. Memorial über das französische Prohibitions-Arret vom 10. Juli 1785.
7. Bemerkungen zu gelesenen Büchern. 1785/86.
8. Über die Entstehung der sittlichen Begriffe in der Entwicklung der Menschheit. 1786/87.
本稿は「4」の「8」の論文のついでである。
- (2) 第二期（一七八七年から一七九五年）(Pestalozzi, ditto, 10. Band) の論文の特記ポイントは「フランス革命の影響を受けた市民社会のあり方に関する論文を中心とする。彼の中心思想は『社会哲学・政治哲学』の傾向をまっとうした。」
1. Memorialia über die Civilbildung. An den Großherzog Leopold von Toskana.
 - ① Fragmentarische Entwürfe eines Memorials über die Aufgaben der Edelleute und Geistlichen bei der Civilbildung. 1787/88.
 - ② Memorial über Civilbildung, besonders über die Einrichtung eines Seminarium für Industrie. 1788.
 - ③ Bemerkungen zu gelesenen Büchern. ("Mentscheit 2. Band")
 - ④ Memorialia über Tuchhandel und Baumwollindustrie im Kanton Bern.
 - ⑤ Beantwortung der Fragen des Berner Kommerzienrats über den Stand der Baumwollindustrie. 11. März. 1789
 - ⑥ Memorial über das Baumwollgewerbe. An Obrist Effinger von Wildegg. 4. April 1789.
4. Memoires. An den Grafen Karl Johann Christian von Zinzendorf.
 - ① Bemerkungen über die zwischen dem ehemaligen Herzog von Mailand und der Republik Bündten zugunsten ihrer italienischen Untertanen geschlossenen Convention. 1790.
 - ② Skizze eines Memoire über die Verbindung der Berfsbildung mit den Volksschulen. 1790.
5. Bemerkungen zu gelesenen Büchern. 1792.
9. Ja oder Nein? Äußerungen über die bürgerliche Stimmung der europäischen Menschheit in den oberen und unteren Ständen, von einem freyen Man. 1793.
7. Gefühle bym Jahrwechsel 1794. Geschrieben für ein Land, wohin sie ganz passen und für anders Länder nur insoweit, als sie passen.

8. Ideen und Note zu Rangierung der Freiheitsbegriffe. Ende 1793.
 9. Bemerkungen zu gelesenen Büchern. 1793./94.
 10. Darzwischenkomit des Menschengefühls im Stret einiger Meinungen über das thierische, das gesellschaftliche und das sittliche Recht unserer Natur. Von einem erwehnten französischen Bürger. 1794.
 11. Aufruf zum Kartoffelbau. Ein Flugblatt an das französische Volk. 1794.
 12. Über Sansculotismus und Christentum. 1794.
 13. Schriften zur Stäiner Volksbewegung
 - ① Über den Zustand und [die] Lage des zürcherischen Landvolks und des Magistrats — seine daher resultirenden Beschwerden und das Benehmen des letztern. Frühjahr. 1795.
 - ② Ursachen des Unzufriedenheit des Landes gegen die Stadt. Frühjahr 1795.
 - ③ Note über die Natur der im Zürichgebieth sich äufferenden Volksbewegung. Frühjahr 1795.
 - ④ Zur Abwendung der Gefahr. Juni 1795.
 - ⑤ Fürsorge für die Opfer der Stäiner Bewegung. An die zürcherische Regierung. Anfang Juli 1795.
 - ⑥ An die Freunde der Freiheit am Zürichsee und der Enden. Den 11. Heumonat 1795.
- 本論文のなかに [6] [11] [13 - 5] [13 - 6] の4論文のことが述べられている。
- (3) 第三期 (一七九五—一七九七) (Pestalozzi, ditto, II Band) の論文の特色は、フランス革命の影響がスイス各地に及び同時に産業の変革による民衆の生活の混乱のなかで『政治改革と経済政策と道德・教育の問題』等が中心課題となっている。
1. Notizen zu Briefen über die Schweiz. 1795./96.
 2. Verfassungsgeschichtliche Bemerkungen zu Auszügen aus zürcherischen Ehegerichtsprotokollen. (Lücken in der Landesverfassung) 1796.
 3. Mahnung zur Verständigung. 1796.
 4. Bemerkungen zu Condorcets Esquisses d'un tableau historique des progres de l'esprit humain. 1796./97.
 5. Predigt an die Franzosen. 1797.
 6. Memorial über die Freyheit des Handels für die Landschaft Zürich. 1797.
 7. Oratio pro Domino. 1797.

80. Figuren zu meinem ABC-Buch oder zu den Anfangsgründen meines Denkens. 1797.

Vorrede

Die Veranlassung dieses Buchs

Vorrede zu der neuen Ausgabe dieser Bogen

Inhalt

Erklärung einiger, in diesem Buche vorkommender Provinzialwörter:

6. Nachlese der in der Wochenschrift für Menschenbildung und in den beiden Nachträgen Seyffarth's schon veröffentlichten und einiger noch unveröffentlichter, in den Handschriften verstreuter Fabeln.

たしむるゆゑなる 本體文字の [へ] "Oratio pro Domo". (家となすの家) にこころい衆やな。

- (4) Pestalozzi Sämtliche Werke, ditto, 9. Band, ss. 205-237.
- (5) ditto, 9. Band, ss. 437-470.
- (6) ditto, 10. Band, ss. 75-170.
- (7) ditto, ss. 213-214.
- (8) ditto, s. 214.
- (9) ditto, s. 238.
- (10) ditto, s. 440.
- (11) ditto, s. 441.
- (12) ditto, s. 442.
- (13) ditto, s. 444.
- (14) ditto, s. 445.
- (15) Jean, Jacques, Rousseau (1712-1778)
- (16) Johann Gottlieb Fichte (1762-1814)
- (17) Pestalozzi Sämtliche Werke. 10. Band, ss. 77-79.
- (18) ditto, s. 79.
- (19) ditto, s. 80.

(20) シュタンス (Stans, 1798-1799) : 一七九八年にナポレオンが、スイスを手中に収めようとすると、各地に反抗のための戦いが起った。ニターヴァルデン州での戦いは、その年の九月九日に始まった。最新式の兵器で武装した一万を越えるフランス勢に立ち向かったのは、十分な武器を持たぬ一五〇〇人ばかりの州兵と農民であった。結果は目に見えていた。スイス側は悲惨であった。シュタンスはルツェルンに近い。町の中心に建つカテドラルの左後ろに聖クララ修道院 (Kloster Sta. Klara) がある。シュタンスでのペスタロッチーの働きは、ここを中心にして戦争孤児たちのために行われた。一七九八年二月から始められ、孤児たちと共同生活を行い、この経験が『シュタンス便り』として一七九九年に公刊されるが、残念ながらこの施設は一七九九年六月には閉鎖を余儀なくされた。この。修道院の外壁には記念碑文が刻まれている。そこには次の言葉が書かれている。《(1)でハインリッヒ・ペスタロッチーがニターヴァルデンの孤児たちのために献身中に、教育の新しい道を発見した一七九八―一七九九》と。二〇〇一年の早春に、わたくしが訪れたとき、小雪の降るなかで修道院のチャペルの鐘が静かになつた。

(21) Pestalozzi Sämtliche Werke. 10. Band. 1931. s. 255.

(22) ditto. s. 262.

(23) ditto. s. 295.

(24) ditto. ss. 295-296.

(25) ditto. s. 303.

(26) ditto. ss. 303-304.

(27) ditto. s. 311.

(28) Pestalozzi Sämtliche Werke. 11. Band. 1933. s. 79.

(29) 「居間の力」(Wohnstube kraft)『居間』はペスタロッチーの教育の基本的概念である。母の知恵から受ける家庭における最初の触れ合いによる教育をわしている。

三

(1) ペスタロッチーが既に一七八〇年代の始めから『探究』の執筆の構想を持っていたことが一七八五年二月一〇日のこの書簡でわかる。長田新『探究』解説』『ペスタロッチー全集』第六巻、平凡社一九五九年、六頁。

(2) Bemerkungen zu gelesenen Büchern (読書摘録) / Pestalozzi Sämtliche Werke. 9. Band. Emanuel Dejmung Walter Güyer. Herbert

ただ自らの実践理性(意志)に従ってのみ方向づけられる。
人間にとっては道徳法則は定言命法であり、道徳的行為は、幸福追求や愛や傾向性によってではなく、道徳法則への尊敬と義務の遵奉によってのみ可能である。こうしたカントの道徳律はペスタロッチーの根本思想に影響を与えている。備考、六・注(13)「カントの自律思想」参照

- (5) Pestalozzi Sämtliche Werke. 12 Band. 1938. s. 5.
- (6) ditto. s. 7.
- (7) ditto. ss. 1-166. から目次をくぐる。

五

- (1) Pestalozzi Sämtliche Werke. 12 Band. 1938. s. 1.
- (2) ditto. ss. 5-6.
- (3) ditto. s. 6.
- (4) ditto. s. 6.
- (5) ditto. ss. 7-8.
- (6) ditto. s. 8.
- (7) ditto. s. 8.
- (8) ditto. ss. 8.
- (9) ditto. s. 8.
- (10) ditto. ss. 8-10.
- (11) ditto. s. 10.
- (12) ditto. ss. 10-12
- (13) ditto. ss. 13-14.
- (14) ditto. ss. 14-18.
- (15) ditto. s. 18.
- (16) ditto. ss. 18-20.

- (17) ditto. ss. 20-22.
 (18) ditto. ss. 22-23.
 (19) ditto. ss. 23-25.
 (20) ditto. ss. 25-26.
 (21) ditto. ss. 26-27.
 (22) ditto. s. 28.
 (23) ditto. ss. 28-31.
 (24) ditto. ss. 31-34.
 (25) ditto. ss. 34-36.
 (26) ditto. ss. 36-38.
 (27) ditto. ss. 38-43.
 (28) Thomas Hobbes (一五八八—一六七九) イギリスの哲学者、自然権(自己保存権)と社会契約説に基づく近代国家論の創始者、経験論、唯物論の流れに属する。彼は人間の自然状態(社会がつけられる前の状態)を、利己的欲望に基づく《万人の万人に立つと考えたが、理性は特別の能力ではなく、譲り渡した絶対主義国家の形成を考えた。さらに、彼は人間を感情と理性から成り・苦の感情だと考えた。自分の利益や幸福への欲望が《快》であり、満足されない時《不快》である。彼は、人間には自分自身の生命を維持するため、各自が欲するままに行動する自由があると説いた。これが彼の言う《自然権》である。
 このホッブスの自然権は、のちにルソーの『社会契約論』に影響し、さらにペスタロッチーの《自然状態・社会状態》等の社会哲学に影響を与えている。
- (29) Pestalozzi Sämtliche Werke: 12. Band, 1938, s. 10.
 《パンドラの箱》について説明をしておこう。《パンドラ (Pandora)》は、ギリシャ神話で、ゼウスが鍛冶(カジ)神ヘファイストスに命じて作らせた人類最初の女。プロメテウスが、天井の火を盗んで人間に与えたことに腹を立てたゼウスは、その報いとして人間に災害をもたらそうと考えた。神々からあらゆる魅力や美徳を授けられたパンドラは、プロメテウスの弟エピメテウスのもとにおくられた。エピメテウスはゼウスの贈り物は受け取ってはならないというプロメテウスの忠告を無視し、パンドラを妻にした。彼女は神々からのみやげ物として、のちに《パンドラの箱》として知られるようになる一個のつばを持参

したが、決して開けてはならないと警告されていた。彼女が好奇心を押さえ切れずふたを開けると、中からあらゆる災害や害悪が飛び出して、あつと言う間に世界に飛び散った。驚いた彼女が、急いでふたを閉じたため、《希望》だけがつばに残った。それ以来、人類はさまざまな災難にみまわれることになったという。他につばの中には人間が得られずはすのあらゆる恩恵がつまっていたのに、バンドラはそれを逃してしまったのだとする伝説もある。

六

- (1) Pestalozzi Sämtliche Werke. 12. Band. 1938. s. 57.
- (2) ditto. s. 62.
- (3) ditto. s. 66.
- (4) ditto. s. 67.
- (5) ditto. s. 67.
- (6) ditto. s. 68.
- (7) ditto. s. 76.
- (8) ditto. s. 79.
- (9) ditto. s. 100.
- (10) ditto. s. 105.
- (11) ditto. s. 106.
- (12) ditto. s. 106.
- (13) 「カントの自律思想」(Immanuel Kant (一七二四—一八〇四) ドイツの哲学者)とは、人類の普遍妥当的(あらゆるところで

あてはまる)な道徳法則は、誰が作り、誰が意志し、行為することを命ずるのか。カントにあつては、それは各自の内的理性であるという。人間は身体をもち、感覚的なものに支配されているが、反面、自己を深く省察する理性を持っている。人間は前者にあつては、自然法に支配されるが、後者においては、自ら立てた道徳法則に、自ら従う自己立法者である。このように、自ら立てた法則に従う行為を《自律》という。彼は「他人ならびに自分の人格において、常に、人格の品位を尊重し、人格を常に目的としてとりあつかい、手段としてとりあつかうことなかれ」と言っているが、この彼の言葉は教育基本法第一条の《人格の完成》に通ずる言葉である。わがベスタロッチーはこのような自律的な道徳を、備えた人間と人間との共同生活のあると

ここに、人類にとつての幸せな共同体が存在すると考えた。この「理想の国家」を形成する市民の陶冶を追究したのである。

- (14) Pestalozzi Sämtliche Werke, 12. Band, 1938, s. 106.
- (15) ditto, s. 113.
- (16) ditto, s. 120.
- (17) ditto, s. 121.
- (18) ditto, ss. 122-3.
- (19) ditto, s. 125.
- (20) ditto, s. 127.

七

- (1) Pestalozzi Sämtliche Werke, 12. Band, 1938, ss. 129-130.
- (2) ditto, ss. 150-1.
- (3) ditto, s. 151.
- (4) ditto, s. 157.
- (5) ditto, s. 157.
- (6) ditto, s. 161.

八

- (1) Pestalozzi Sämtliche Werke, 12. Band, 1938, s. 162.
- (2) ditto, s. 162.
- (3) ditto, ss. 162-3.
- (4) ditto, ss. 163-4.
- (5) ditto, s. 164.
- (6) ditto, ss. 164-5.

- (7) ditto, s. 165.
- (8) ditto, s. 166.

九

- (1) Pestalozzi Sämtliche Werke. 12 Band. 1938. s. 6.
- (2) Eduard Spranger. Pestalozzis Denkenform. 1961. s. 4. 吉本均訳『教育の思考形式』明治図書、一九六二、一三一—一四頁。
- (3) ditto, s. 57.
- (4) Käthe Silber (一九〇二—一九七九、?)でケーテ・シルバーについて紹介しておきたい。E. Spranger 門下の偉才であり、ドイツにおいて第二次世界大戦後におけるペスタロッチー研究の第一人者であるといえる。特色は一八世紀後半から一九世紀初頭にかけてスイスを中心とする西欧社会の歴史の変動のなかで民衆の生活に光を当てようとするペスタロッチーの真摯な活動を政治改革・社会政策的観点にたつて捉えようとしている研究態度が、明確に現されている。彼女は、一九〇二年に東部ドイツに生まれ、ポーランドのポーゼン・ギムナジウムを終えた後、一九二七—三一年までベルリン大学でドイツ文学・歴史学ならびに哲学を専攻し、Spranger 教授のもとで一九三二年、『アンナ・ペスタロッチー』シュルテスとペスタロッチーをめぐる婦人たち』(Anna Pestalozzi = Schulteß und der Frauenkreis um Pestalozzi, 1932) という論文で、哲学博士の学位を取得した。一九三〇年代におけるナチスの台頭は、この俊才の運命を大きく左右した。ユダヤ系であるがゆえに市民権を剥奪され、一切の公職から閉めだされたが、当時の逼迫した状況のなかで数年間、恩師 Spranger 教授の助手として物理的・精神的に支えられ、ペスタロッチーの研究に専念できたことは、彼女の生涯において忘れ難い思い出となっていた。その後、一九三〇年代のおわりまで、ベルリンの「ペスタロッチー＝フリーベル館」で幼稚園ならびに小学校低学年のための教師の養成に尽力し、あるいは、ささやかなユダヤ人小・中学校の教師として子どもたちの教育に携った。しかし一九三九年七月、ナチスの弾圧政策とユダヤ人迫害に身の危険を感じ、スウェーデンに亡命した。その間ドイツでは一家離散し、彼女の身内はすべてナチスのために殺害された。一九四四年にエディンバラ大学のドイツ語の時間講師ならびに同市の師範学校の代用教員としての職を見いだすまで、彼女は異国の地での知のない孤独な貧しい歳月を家政婦となつて過ごした。一九七六年三月、エディンバラ大学を辞するまで三〇余年間、同大学のドイツ語の講師ではあったが、それも決して彼女にふさわしい職種ではなく、正式な大学講師の称号も与えられてはいなかったようである。むしろ彼女の半生は、もっぱらペスタロッチーの研究にささげられていたといつてよい。前記の学位論文のほかに、『ペスタロッチーの理想の女性、ゲルトルート』(一九五三

年)、『ペスタロッチー—人間と事業』(一九五七年)、『ペスタロッチーとイギリスならびにアメリカとの関係』(一九六五年)等々の執筆活動、とりわけ、『ペスタロッチー全集』(校訂版)第二六・二七巻の共同編集者としての業績は、特筆に値する。彼女の数奇な生涯にとって、ペスタロッチーは彼女の心の支えであった。(備考: Käte Silber: PESTALOZZI ~ Der Mensch und sein Werk. 1957. 前原 寿訳『ペスタロッチー—人間と事業—』岩波書店、一九八一年。《訳者後書きより》、ケート・シルバーに「ついで要約した。》

(5) Pestalozzi Sämtliche Werke. 1939, 13. Band, s. 52 以下参照。

(6) Käte Silber: PESTALOZZI ~ Der Mensch und sein Werk. 1957, s. 104.

おわりに

(1) Käte Silber: PESTALOZZI ~ Der Mensch und sein Werk) 1957, ss. 243-244.

(2) ditto, s. 246.